

南地心中

泉鏡花

青空文庫

「今のは、」

初はつ阪さかものの赤毛布あかげつと、という処ところを、十月の半ば過ぎ、小春風こはるなぎで、ちと逆上のぼせるほどな暖かさに、下着かきさえ襲かねて重し、野暮な縮しまも隠されず、頬被ほおかぶりがわりの烏打帽くわだぼうで、朝から見物に出掛けた……この初阪いであとは、伝え聞く、富士、浅間あさま、大山、筑波つくば、はじめて、出立いでたつを初山とと称となうるに倣ならつて、大阪の地へ初見参ういけんさんという意味である。

その男が、天満橋てんまばしを北へ渡越した処で、同伴つれのものに聞いた。

「今のは？」

「大阪城でございますさ。」

と片頬笑みでわざと云う。結城ゆうきの藍微塵あいみじんの一枚着、唐棧柄とうざんがらの袷羽織あわせばおり、茶献上けんじょうは博多かたの帯をぐいと緊め、白柔皮しろなめしの緒の雪駄穿せつたばきで、髪をすつきりと刈つた、氣の利いた若いもの、風俗は一目で知れる……俳優やくしや部屋の男衆おとこしゆで、初阪ものには不似合な伝法。

「まさか、天満の橋の上から、淀川よどがわを控えて、城を見て——当人寝が足りない処へ、こ
う照てりつけられて、道頓堀どうとんぼりから千日前、この辺の沸にえくり返る町の中を見物だから、茫ぼうとな
つて、夢を見たようだけれど、それだつて、大阪に居る事は確たしかに承知の上です——言わな
くつても大阪城だけは分ろうじやないか。」

「御道理で、ふふふ、」

男衆はまた笑いながら、

「ですがね、欄干へ立つて、淀川堤を御覧なされると、貴方あなた、恍惚うつとりとおんなさいました
ぜ。熟じつと考え込んでおしまいなすつて、何かお話しするのもお気の毒なような御様子です
から、私も黙だんまりでね。ええ、……時間の都合で、そちらへは廻らないまでも、網島の見当
は御案内をしろつて、親方に吩咐いいつかつて参ったんで、あすこで一ツ、桜宮から網島を口上
で申し上げようと思つていたのに、あんまり腕組をなすつたんで、いや、案内者、大きに
水を見て涼みました。

それから、ずっと黙りで、橋を渡った処で、（今のは、）とお尋ねなさるんでさ、義理
にも大阪城、と申さないじゃ、第一日本一の名城に対して、ははは、」とものありげにち
よつと顔を見る。

初阪は鳥打の庇に手を当て、

「分りましたよ。真田幸村に対しても、決して粗略には存じません。萌黄色の海のよ

うな、音に聞いた淀川が、大阪を真二つに分けたように悠揚流れる。

電車の塵も冬空です……澄透った空に晃々と太陽が照って、五月頃の潮が押寄せる

かと思う人通りの激しい中を、薄い霧一筋、岸から離れて、さながら、東海道で富士を視めるように、あの、城が見えたつけ。

川蒸汽の、ばらばらと川浪を蹴るのなんぞは、高櫓の瓦一枚浮かしたほどにも思われず、……船に掛けた白帆くらいは、城の壁の映るのから見れば、些細な塵です。

その、空に浮出したような、水に沈んだような、そして幻のような、そうかと思うと、歴然と、ああ、あれが、嬰兒の時から桃太郎と一所にお馴染の城か、と思つて見ていると、城のその屋根の上へ、山も見えぬのに、鶴が乗つて来そうな雲が、真黒な壁で上から圧附けるばかり、鉛を熔かして、むらむらと湧懸つて来たろうではないか。」

初阪は意気を込めて、杖をわきに挟んで云つた。

七筋ばかり、工場の呼吸いきであろう、黒煙くろけむりが、こう、風がないから、真直まつすぐに立騰たちのかつて、城の櫓やぐらの棟を巻いて、その蔽おおい被かぶつた暗い雲の中で、末が乱れて、むらむらと崩く立たつて、倒さかさまに高く淀川の空へ靡なびく。……

なびくに脈を打って、七筋ながら、処々ところどころ、斜めに太陽の光を浴びつつ、白泡立てて渦うずいた、その凄すこかった事と云つたら。

天守の千畳敷へ打込んだ、関東勢の大砲おおづつが炎を吐いて転がる中に、淀君をはじめ、夥あ多またの美人の、練衣ねりぎぬ、紅の袴が寸断すた々々に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える。……雲を貫く、工場の太い煙は、丈に余る黒髪が、纏もつれて乱れるよう、そして、倒さかさまに立ったのは、長に消えぬ人々の怨恨うらみと見えた。

大河おおかわの両岸りょうぎしは、細い樹の枝に、薄紫もやの靄やが、すらすら。蒼空あおぞらの下を、矢輻やぼねの晃き々らきらと光る車が、駈かけてもいたのに、……水には帆の影も澄んだのに、……どうしてその時、大阪城の空ばかり暗澹あんたんとして曇つたろう。

「ああ、あの雲だ。」

と初阪は橋の北詰に、ひしひしと並んだ商人あきんど家の、軒の看板に隠れた城の櫓やぐらの、今は

雲ばかりを、フト仰いだ。

が、俯向いて、足許に、二人連立つ影を見た。

「大丈夫だろうかね。」

「雷様ですか。」

男衆は逸早く心得て、

「串戯じゃありませんぜ。何の今時……」

「そんなら可いが、」

歩行出す、と暗くなり掛けた影法師も、烈しい人脚の塵に消えて、天満筋の真昼間。

初阪は晴やかな顔をした。

「凄かったよ、私は。……その癖、この陽気だから、自然と淀川の水気が立つ、陽炎の

ようなものが、ひらひらと、それが櫓の面へかかると、何となく、※と美しい幻が添って、

城の名を天下に彩っているように思われたつけ。その花やかな中にも、しかし、長い、濃

い、黒髪が潜んで、滝のように動いていた。」

城を語る時、初阪の色酔えるがごとく、土地馴れぬ足許は、ふらつくばかり危まれたが、

对手が、ちゃんと来いの男衆だけ、確に引受けられた酔漢に似て、擦合ひ、行違う人

の中を、傍目も触らず饒舌るのであった。

「時に、それについて、」

「あの、別嬪の事でしよう。私たちが立停まつて、お城を見ていました。四五間さきの所に、美しく立つて、同じ方を視めていた、あれでしよう。……貴方が（今のは！）ツて一件は。それ、奴を一人、お供に連れて、」

「奴を……十五六の小間使だぜ。」

「当地じや、奴ツてそう言います。島田鬻に白丈長をピンと刎ねた、小凜々しい。お約束でね、御寮人には付きものの小女ですよ。あれで御寮人の鬻が、元禄だった日にや、菱川師宣えがく、というんですね。

何だろう、とお尋ねなさるのは承知の上でさ、……また、今のを御覧なすつて、お聞きなさらないじや、大阪が怨みます。」

「人が悪いな、この人は。それまで心得ていて、はぐらかすんだから。（大阪城でございませう、）はちと癪だろうじやないか。」

「はははは。」

「しかし縁のない事はない。そうして、熟とあの、煙の中の凄い櫓を視めっていると、どう

だろう。

四五間前さきに、上品な絵の具の薄彩色うすさいしきで、彳亍たたずでいた、今の、その美人の姿だがね、
 …淀川の流れに引かれた、私の目のせいなんだろう。すつと向うに浮いて行つて、遠くの、
 あの、城の壁の、矢狭間やざまとも思う窓から、顔を出して、こつちを覗のぞいた。そう見えた。い
 つの間にか、城の中へ入つて、向直つて。……

黒雲の下、煙の中で、凄いの、美しいの、と云つて、そりやなかつた。」

三

「だから、何だか容易ならん事が起つた、と思つて、……口惜くやしいが聞くんです。
 実はね、昨夜ゆうべ、中座を見物した時、すぐ隣の棧敷さじきに居たんだよ、今の婦人おんなは……」と
 頷うなずくようにして初阪は云う。

男衆はまた笑つた。

「ですとも。それを知らん顔で、しらばつくて、唯ただいま今いちげん一見けんという顔をなさるから、
 はぐらかして上げましたんでさ。」

「だって、住吉^{すみよし}、天王寺も見ない前から、大阪へ着いて早々、あの婦^{おんな}は？ でもあるまいと思う。それじゃ慌て過ぎて、振袖に躓^{けつまず}いて転ぶようだから、瘦我^{やせがまん}我慢で黙然^{だんまり}でいたんだ。」

「ところが、辛抱が仕切れなくなつたでしょう、ごもつともですとも。親方もね、実は、お景物にお目に掛ける、ちようど可^いいからツて、わざと昨夜^{ゆうべ}も、貴方^{あなた}を隣棧敷へ御案内申したんです。

附^{つけ}込みでね、旦那と来ていました。取巻きに六七人芸妓^{げいこ}が附いて。」

男衆の顔を見て、

「はあ、すると堅気かい、……以前はとにかく、」

また男衆は、こう聞かれるのを合点^{がってん}したらしく領^{うなず}くのであつた。

「貴方、当時また南新地から出ているんです。……いいえ、旦那が變つたんでも、手が切れたのでもありません。やつぱり昨夜^{ゆうべ}御覽なすつた、あれが元からの旦那でね。ええ、しかも、ついこの四五日前まで、久しく引かされて、桜の宮の片^{かた}辺^{ほとり}というのに、それこそ一枚絵になりそうな御寮人で居たんですがね。あの旦那の飛んだもの好^{ずき}から、洒落^{しゃれ}にまた鑑札を請けて、以前のままの、お珊^{さん}という名で、新しく披露^{ひろめ}をしました。」と質実^{じみ}に話

す。

「かみがた阪地は風流だね、洒落に芸者に出すなんざ、悟ったもんですぜ、根こぎでていけ手活にした花を、人助けのため拝ませる、という寸法だろう。私なんぞも、お底でかけ土産にありついたという訳だ。」

「いいえ、隣棧敷のひ緋の毛氈もうせんにほおづえ頬杖や、橋の欄干袖振掛けて、という姿ぐらいではありません。貴方、もつと立派なお土産を御覧なさいましょうよ。御覧なさいまし、明日、翌々日の晩は、唯今のお珊の方が、千日前から道頓堀、新地をかけて宝市のねり練に出て、下あさつてげ髪、緋の袴はかまという扮装で、八年ぶりで練りますから。」

一言、ひとこと下げ髪、緋の袴、と云ったのが、目のあたり城の上の雲を見た、初阪の耳うがを穿うがつて響いた。

「何、下げ髪で、緋の袴？……」

「勿論一人じゃありません——確か十二人、同じ姿で揃って練ります。が、自分の髪をれげ髪なしに解ときほぐして、その緋の袴と擦れ擦れに丈に余るつてのは、あの婦おんなばかりだと云つたもんです。一度引いて、もうそんなにた経ちますけれども、私わつしあ今日も、つい近間で見て驚きました。」

苦勞も道楽もしたろうのに、かりがねびたい 雁金額の生際が、一厘だって拔上がつていませんやね、ねえ。

やつぱり入髪なしを水で解いて、宝市は屋台ぐるみ、象を繋いで曳きましようよ。

旦那もね、市に出して、お珊さんのその姿を、見たり、見せたりしたいばかりに、素晴らしく派手を遣つて、披露をしたんだつて評判です。

その市女は、芸妓に限るんです。それも芸なり、容色なり、選抜きでないと、世話人の方で出しませんから……まず選ばれた婦は、一年中の外聞といったわけです。

その中のお職だ、貴方。何しろ大阪じや、浜寺の魚市には、活きた竜宮が顕れる、この住吉の宝市には、天人の素足が見えるつて言います。一年中の紋日ですから、まあ、是非お目に掛けましょう。

貴方、一目見て立すくんで、

「立すくみは大袈裟だね、おおげさ 人聞きが悪いじゃないか。」

「だって、今でさえ、ぞつと 悚然なすつたじやありませんかね。」

男衆の浮かせ調子を、初阪はなぜか沈んで聞く。……

「まったくそりや悚然ぞつとしたよ。ひとりでに、あの姿が、城の中へふいと入って、向直つて、こつちを見るらしい気がした時は。

黒い煙も、お珊さんか、……その人のために空に被かぶさつたように思つて。

天満の鉄橋は、瀬多の長橋ではないけれども、美濃みのへ帰る旅人に、怪しい手箱ことづを託たくけたり、俵藤太たわらとうだに加勢を頼んだりする人に似たように思つたのだね。

由来、橋の上で出会う綺麗な婦おんなは、すべて凄すこいとしてある。――

が、場所によるね……昨夜ゆうべ、隣棧敷で見た時は、同じその人だけれど、今思うと、まるで、違つた婦おんなさ。……君も関東ものだから遠慮なく云うが、阪地かみがたの婦おんなはなぜだろう、生きてるのか、死んでるのか、血というものがあるのか知らん、と近所に居るのも可厭いやなくらい、酷ひどく、さました事があつたんだから……」

「へい、何がございました。やたらに何か食べたんですかい。」

「何、詰つまらんことを……そうじゃない。余りと言えれば見苦しいほど、大入芝居の棧敷だというのに、旦那かね、その連つれの男に、好三昧すきざんまいにされてたからさ。」

「そこは妾てかけものの悲しさですかね。どうして……当人そんなぐうたらじゃない筈はずです。意い地じ張ばりもちつと可こ恐おそいような婦おんなでね。以前、芸妓げいしやで居いました時とき、北新地きたのしんち、新町しんまち、堀江ほりえが、一つ舞台で、芸較げべを遣やつた事があります。その時、南から舞で出でました。もつとも評判な踊手なんですが、それでも他場所ほかの姉さんに、ひけを取るまい。……その頃北に一人、向うへ廻まわして、ちと目に余る、家元随一と云う名取りがあつたもんですから、生命いのちがけに氣を入れて、舞つたのは道成寺どうじやうじ。貴方、そりや近頃の見ものだつたと評判しまし

た。

能がかりか、何か、白の鱗うろこの膚はだ脱だぎで、あの髪さつを颯さつと乱して、ト撞しゅもく木を被かぶつて、供養の鐘を出た時は、何となく舞台が暗くなつて、それで振袖の襦じゆ袢ばんを透といて、お珊さんさんの真ま白しろな胸が、銀色に蒼味あおみがかつて光つたつて騒さわぎです。

そのかわり、火のように舞い澄すまして楽屋へ入ると、氣を取詰めて、ぼつたり倒れた。後見きつが、回生剤きつを吞くまそうと首を抱く。一人が、装束の襟くつろを寛くげようと、あの人の胸を開けたかと思うと、キヤツと云つて尻持をついたはどうです。

鳩尾みずおちを緊しめた白羽しろは二重の腹巻の中へ、生々なまなまとした、長いのが一尾びき、蛇へびですよ。畝うね々と卷ね込めてあつた、そいつが、のッそり、」と慌あわしい懷手、黒八丈を襲かねた襟から、

拇おやゆび指を出して、ぎっくり、と蝮まむしを拵こぎえて、肩をぶるぶると遣ひつこつて引込ひっこませて、

「鎌首を出したはどうです、いや聞いても恐れる。」とばたばたと袖はたを払く。

初阪もそれはしかねない婦おんなと見た。

「執念の深いもんだから、あやかる気で、生命いのちがけの膚はだに絡まとつたというわけだ。」

「それもあります。ですがね、心願も懸けたんですとき。何でも願かなが叶かなうと云います……呪詛のろいも、恋なさけも、情よくも、意地張も同じ事。……その時鳩尾みずおちに巻いていたのは、高津

辺の蛇屋で売ります……大瓶おおがめの中にぞろぞろ、という一件もので、貴方御存じですか。」

初阪は出所を聞くと悚然ぞっとした。我知らず声こゑを潜ひそめて、

「知ッてる……生紙きがみの紙袋かんぶくろの口を結えて、中に筋張った動脈のようにのたくる奴やつを買

つて帰つて、一晩内に寝かしてそれから高津の宮裏の穴へ放すんだってね。」

五

「ええ、そうですよ。その時、願ねがいごと事を、思込んで言聞かせます。そして袋の口ほどを解ほどくと、によろによると這出はいだすのが、きつと一度、目の前でとぐろを巻いて、首くびを擡もたげて、そ

の人間の顔を熟と視て、それから横穴へ入って隠れるって言います。

そのくらい念の入った長虫ですから、買手が来て、蛇屋が貯えたその大瓶の圧蓋を外すと、何ですとき。黒焼の註文の時だと、うじやうじや我一に下へ潜って、瓶の口がぐつと透く。……放される客の時だと、ぬらぬら争って頭を上げて、瓶から煙が立つようですって、……もし、不気味ですなあ。」

初阪は背後ざまに仰向いて空を見た。時に、城の雲は、賑かな町に立つ埃よりも薄かった。

思懸けず、何の広告か、屋根一杯に大きな布袋の絵があつて、下から見上げたものの、さながら唐子めくのに、思わず苦笑したが、

「昨日もその話を聞きながら、兵庫の港、淡路島、煙突の煙でない処は残らず屋根ばかりの、大阪を一目に見渡す、高津の宮の高台から……湯島の女坂に似た石の段壇を下りて、それから黒焼屋の前を通つた時は、軒から真黒な氷柱が下つてるように見えて冷りとしたよ。一時に寒くなつて——たださえ沸上り湧立つてる大阪が、あのまた境内に、おでん屋、てんぷら屋、煎豆屋、とかつかつぐらぐらと、煮立て、蒸立て、焼立てで、それが天火に曝されているんだからね——びつしより汗になったのが、お底ですっかり冷く

なつた。但し余り結構なお庇ではないのさ。

大阪へ来てから、お天気続きだし、夜は万燈の中に居る気持だし、何しろ暗いと思ったのは、町を歩行^{ある}く時でも、寝る時でも、黒焼屋の前を通つた時と、今しがた城の雲を見たばかりさ。」

男衆は偶^ふと言^{ことば}を挟んで、

「何を御覧なさる。」

「いいえね、今擦違つた、それ、」

とちよつと振向きながら、

「それ、あの、忠兵衛の養母^{おふくろ}といつた隠居さんが、紙袋^{かんぶくろ}を提げているから、」

「串^{じょうだん}戯^ごじゃありません。」

「私は例のかと思つた、……」

「ありや天満の亀^{かめ}の子煎餅^{こせんべい}、……成程亀屋の隠居でしょう。誰が、貴方、あんな婆さんが禁厭^{ましない}の蛇^{まじない}なんぞを、」

「ははあ、少い^{わか}ものでなくつちや、利かないかね。」

「そりや……色恋の方ですけれど……慾^{よく}の方となると、無差別ですから、老年^{としより}はなお烈

しいかも知れません。

分けてこの二三日は、黒焼屋の蛇が売れ盛るつて言います……誓文^{せいもんばらい}払^{はら}で、大阪中の呉服屋が、年に一度の大見切売をしますんでね、市中もこの通りまた別^{にぎわ}して賑^{にぎわ}いませ。

心齋橋筋の大丸なんかでは、景物の福引に十両二十両という品ものを発奮^{はつふん}んで出しますんで、一番引当てよう^{りようけん}了^{りようけん}簡^{かん}で、禁厭^{まじない}に蛇の袋をぶら下げて、杖を支^ついて、お十夜という形で、夜中に霜を踏んで、白髪^{しらが}で橋を渡る婆さんもあるにやあるんで。」

六

男衆もちよつと町中^{まちなか}を^{みまわ}した。

「まったくかも知れませんが、何しろ、この誓文^{せいもん}払^{はら}の前後に、何千条^{すじ}ですかね、黒焼屋の瓶^{かめ}が空虚^{から}になった事があるつて言いますから。慾^{おそろ}は可恐^{おそろ}しい。悪くすると、ぶら提^ひげてるの^{ぶつ}に打撞^{ぶつ}らないとも限りませんよ。」

「それ！ だから云わない事じやない。」
内端^{うちわ}ながら二ツ三ツ杖^{ステッキ}を掉^ふつて、

「それだけでなくツてさえ、こう見渡した大阪の町は、通も路地も、どの家も、かつと陽気に明い中に、どこか一個所、陰気な暗い処が潜んで、礼儀作法も、由緒因縁も、先祖の位牌も、色も恋も罪も報も、三世相一冊と、今の蛇一足ずつは、主になって隠れていそうな気がする処へ、蛇瓶の話を昨日聞いて、まざまざと爪立足で、黒焼屋の前を通つてからというものは、うっかりすると、新造も年増も、何か下搔の棲あたりに、一条心得ていそうでならない。

昨夜も、芝居で……」

男衆は思出したように、如才なく一ツ手を拍つた。

「時に、どうしたと云うんですえ、お珊さんが、その旦那と？……」

「まあ、お聞き——隣合つた私の棧敷に、髪を桃割に結つて、緋の半襟で、黒繻子の襟を掛けた、黄の勝つた八丈といった柄の着もの、紬か何か、緋の羽織をふつくりと着た。ふさふさの簪を前のめりに挿して、それは人柄な、目の涼しい、眉の優しい、口許の柔順な、まだ肩揚げをした、十六七の娘が、一人入っていたらう。……出来るだけおつくりをしたろうが、着ものも帯も、余りいい家の娘じゃないらしいのが、」

「居ました。へい、親方が、貴方に差上げた棧敷ですから、人の入る訳はないが、と云つ

て、私が伺いましたつけ。貴方が、（構いやしない。）と仰有るし、そこはね、大したお目触りのものではなし……あの通りの大入で、ちよつと退けようツて空場も見つからないものですから、それなりでお邪魔を願ッておきました。

後で聞きますと、出方が、しんせつに、まあ、喜ばせてやろうツて、内々で入れたんだそう。ありや何ですツて、逢阪下の辻——ええ、天王寺に行く道です。公園寄の辻に、屋台にちよつと毛の生えたくらいの小さな店で、あんころ餅を売っている娘だそうです。いい娘ですね。」

それは初阪がはじめて聞く。

「そう、餅屋の姉さんかい……そして何だぜ、あの芝居の厠に番をしている、爺さんね、大どんつくを着た逞しい親仁だが、影法師のように見える、太く、よぼけた、」

「ええ、駕籠伝、駕籠屋の伝五郎ツて、新地の駕籠屋で、ありやその昔鳴らした男です。もう年紀の上に、身体を投げた無理が出て、便所の番をしています。その伝が？」

「娘の、爺さんか父親なんだ。」

これは男衆が知らなかった。

「へい、」

「知らないのかい。」

「そうかも知れませんが、私^{わつし}あ御存じの土地^{とちつこ}児じやないんですから、見たり、聞いたり、透^す切^{きぎれ}だらけで。へい、どうして、貴方？」

「ところが分った事がある。……何しろ、私が、昨夜^{ゆうべ}、あの棧敷へ入った時、空いていた場所は、その私の処と、隣りに一間^{ひとま}。」

「そうですよ。」

「その二間しかなかったんだ。二丁がカチと入った時き。娘を連れて、年配の出方が一人、横手^{とおり}の通の、竹格子だね、中座のは。……扉^{ひらき}をツイと押して、出て来て、小さくなつて、背後^{うしろ}の廊下、お極^{きま}りだ、この処へ立つ事無用。あすこへ顔だけ出して踞^{しゃが}んだもんです。

（旦那、この娘^こを一人願われませんでござりましょうか。内々^{うちうち}のもので、客ではござりません。お部屋へ知れますと悪うござりますが、貴下^{あなたさま}様思召^{おぼしめし}で、）と至つて慇懃^{いんぎん}です。

資本^{もとで}は懸^からず、こういう時、おのぼりの氣前を見せるんだ、と思つたから、さあさあ御遠慮なく、で、まず引受けたんだね。」

七

「ずっと前へお出なさい、と云つて勸めても、隅の口に遠慮して、膝に両袖を重ねて、溢れる八ツ口の、綺麗な友染を、袂へ、手と一所に推込んで、肩を落して坐つていたがね、……可愛らしいじゃないか。赤い紐を緊めて、雪輪に紅梅模様の前垂がけです。」

それでも、幕が開いて芝居に身が入って来ると、身体をもじもじ、膝を立てて伸上つて——背後に引込んであるんだから見辛いさね——そうしちゃ、舞台を覗込むようにしていたつけ。つい、知らず知らず乗出して、仕切にひつたりと胸を附けると、人いきれに、ほんのりと瞼を染めて、ほつとなつたのが、景氣提灯の下で、こう、私とまず顔を並べた。おのぼり心の中に惟えらく、光栄なるかな。

まあ、お聞きつたら。

そりや可かつたが、一件だ。」

「一件と……おつしやると?」

「長い、長い。」

「その娘が、蛇を……嘘でしょう。」

「間違つたに違いない。けれども高津で聞いて、平家の水鳥で居たんだからね。幕間にちよいと楽屋へ立違つて、またもとの所へ入ろうとすると、その娘の袂の傍に、紙袋が一つ出ています。」

並んで坐ると、それがちようど膝になろうというんだから、大に怯んだ。どうやら気のせいか、むくむく動きそうに見えるじやないか。

で、私は後へ引退つた。ト娘の挿した簪のひらひらする、美しい総越しに舞台の見えるのが、花輪で額縁を取つたようで、それも可き。

所へ、さらさらどかどかです。荒いのと柔なのと、急ぐのと、入乱れた聲を立てて、七八人。小袖幕で囲つたような婦の中から、赫と真赤な顔をして、痩せた酒顛童子という、三分刈りの頭で、頬骨の張つた、目のぎよろりとした、なぜか額の暗い、殺氣立つた男が、詰襟の紺の洋服で、靴足袋を長く露した服筒を膝頭にたくし上げた、という妙な扮装で、その婦たち、鈍太郎殿の手車から転がり出したように、ぬつと発奮んで出て、どしんと、音を立てて躍込んだのが、隣の棧敷で……

唐突、横のめりに両足を投出すと、痛いほど、前の仕切にがんと支いた肱へ、頭を乗せて、自分で頸を掴んでも、そのまま仰向けにぐたりとなる、可いかね。

顔へ花火のように提灯の色がぶツかります。天井と舞台を等分に睨み着けて、（何じやい！）と一つ怒鳴る、と思うと、かつと云う大酒の息を吐きながら、（こら、入らんか、）と喚いたんだ。

背後に、島田やら、銀杏返しやら、累つて立つた徒は、右の旦那よりか、その騒ぎだから、皆が見返る、見物の方へ気を兼ねたらしく、顔を見合わせていたつけが。

この一喝を啖うと、べたべたと、蹴出しも袖も崩れて坐った。

大切な客と見えて、若衆が一人、女中が二人、前茶屋のだろう、附いて来た。人数は六人だったがね。旦那が一杯にのしてるから、どうして入り切れるもんじやない。随分肥ったのも、一人ならずさ。

茶屋のがしきりに、小声で詫を云つて叩頭をしたのは、御威勢でもこの外に場所は取れません、と詫びたんだろう。（構いまへんで、お入りなされ。）

まずい口真似だ、」

初阪は男衆の顔を見て微笑んだが、

「そう云つて、茶屋の男が、私に言も掛けないで、その中でも、なかんづく臀の大きな大年増を一人、こつちの場所へ送込んだ。するとまたその婦が、や、どツこいしよ、と掛声

して、澄まして、ぬつと入って、ふわりと裾埃すそごみで前へ出て、正面充満いっぱいに陣取つたろう。
」

八

「娘はこの肥満女ふとつちよに、のしのし隅っこへ推着おっつけられて、可恐おそろしく見勝手が悪くなった。
ああ、可哀いじらそうに思う。ちょうど、その身体からだが、舞台と私との中垣になったもんだからね。可憐いじらしいじゃないか……

密そつと横顔で振向いて、俯目ふしめになつて、（貴下あんたはん、見憎うおますやろ、）と云つて、極きまりの悪そうに目をぱちぱちと瞬いたんです。何事も思いません。大阪中の詫言わびごとを一人で
された気がしたぜ。」

男衆は頭つむりを下げた。

「御道理ごもつともで。」

「いや、まったく。心配しないで楽に居て、御覧々と重ねて云うと、芝居で泣いたなりのしっとりした眉まみえを、嬉しそうに莞爾にっこりして、向うを向いたが、ちよつと白い指で压おさえな

がら、その花簪はなかんざしを抜いたはどうだい。染分そのわけの総ふさだけでも、目障りになるまいという、しおらしいんだね。

（酒だ、酒だ。疾はやくせい、のろま！）ときづくり、と胸を張はり反そらして、目を剥むく。こいつが、どろんと濁にごつて血走ちをつてら。ぐしやぐしや見上げ皺しわが揉も上みあつて筋だらけ。その癖、すぺりと髻ひげのない、まだ三十くらい、若いんです。

（はいはい、たつた今、直じきに、）とひよこひよこ敷居に擦附すりける、若衆わかしゅは叩頭おしげをしいしい、（御寮人様、行届いきまへん処は、何分、）と、こう内証で云った。

その御寮人と云われた、……旦那の背後うしろに、……髪はやっぱり銀杏返しだっけ……お召の半コオトを着たなりで控えたのが、

「へい、成程、背後うしろに居ました。」

「お珊かたの方かね、天満橋で見た先刻さつきのだ。もつとも東の雛壇ひなだんをずらりと通して、柳桜が、色と姿を競きつた中にも、ちよつとはあるまいと思う、容色きりようは容色と見たけれども、齒痒はがゆいほど意気地いきじのない、何て腑ふの抜けた、と今日より十段も見劣りがしたって訳は。……

いずれ妾めかけだろう。慰まれものには違いないが、若い衆も、（御寮人、）と奉つて、何分、旦那を頼む、と云う。

取巻きの芸妓たち、三人五人の手前もある。やけに土砂を振掛けても、突張返った洋服の亡者一個、掌に引丸げて、捌を附けなけりや立ちますまい。

ところが不可い。その騒ぐ事、暴れる事、棧敷へ狼を飼ったようです。（泣くな、わい等、）と喚く——君の親方が立女形で満場水を打ったよう、千百の見物が、目も口も頭も肩も、幅の広いただ一人の形になつて、啜泣きの声ばかり、誰が持った手巾も、夜会草の花を昼間見るように、ぐつしより萎んで、火影の映るのが血を絞るような処だつけ——（芝居を見て泣く奴があるものかい、や、怪体な！

舞台でも何を泣えくさるんじやい。かつと喧嘩を遣れ、面白うないぞ！ 打殺して見せてくれ。やい、腸を掴みだせ、へん、馬鹿な、）とニヤリと笑う。いや、そのね、ニヤリと北叟笑みをする凄さと云つたら。……待てよ、この御寮人が内証で情人をこしらえる。嫉妬でその妾の腸を引摺り出す時、きつと、そんな笑い方をする男に相違ないと思つた。

可哀を留めたのは取巻連さ。

夢中になつて、芝居を見ながら、旦那が喚くたびに、はつとするそうで、皆が申合はせた形で、ふらりと手を挙げる。……片手をだよ。……こりや、私の前を塞いだ肥満女も

同じく遣った。

その癖、默然^{だんまり}でね、チトもしお静^{しずか}に、とも言い得ない。

すると、旦那です……（馬鹿め、止めちまえ、）と言いながら、片手づきの反身^{そりみ}の肩を、御寮人さ、そのお珊の方の胸の処へ突^{つき}つけて、ぐたりとなつた。……右の片手を逆に伸^のして、引合せたコオトの襟を引^ひ掴^{つか}んで、何か、自分の胸が窮屈^{きうくつ}そうに、こう跪^{もが}いて、引^ひ開^ひけようとしたんだがね、思う通りにならなかつたもんだから、（ええ）と云うと、か
と開^はけた、細い黄金鎖^{きんぐさり}が晃然^{きやうり}と光る。帯を掴んで、ぐい、と引いて、婦^{おんな}の膝を、洋服の尻^{かいこ}へ搔^か込んだりと思うと、もろに凭^{もたれ}懸^かつた奴が、ずるずると這^{すべ}つて、それなり真仰向^{まあおもむ}けさ。傍若無人だ。」

九

「膝枕をしたもんです。その野分^{のわき}に、衣紋^{えもん}が崩れて、褌^{つま}が乱れた。旦那の頭は下搔^{したがい}の棲^すを裂いた体^{てい}に、紅入友染^{べにいりゆうぜん}の、膝の長襦袢^{ながじゆばん}にのめずつて、靴足袋をぬいと二ツ、仕切を空へ突出したと思え。」

大蛇のような軀いびきを搔かく。……妾めかけはいいなぶりものにされたじゃないか。私は浅ましいと思つた。大入の芝居の棧敷で。

江戸兎えとつこだと、見たが可い！ 野郎がそんな不状ぶざまをすると、それが情人いろなら簪かんざしでも刺殺す……金子かねで売つた身体からだだったら、思切つて、衝つと立って、袖を払つて帰るんだ。

処を、どうです。それなりに身を任せて、静じつとして、しかも入身いれみに娜々なよなよとしているじゃないか。

掴つか寄せられた帯も弛ゆるんで、結び目のずるりと下つた、扱帯しごきの浅葱あさぎは冷たそうに、提灯あかりの明を引いて、寂しく婦の姿を庇かばう。それがせめてもの思遣おもいやりに見えたけれども、それさえ、そうした度の過ぎた酒と色に血の荒びた、神經のとげとげした、狼の手で掴出された、青光あおびかりのする腸はらわたのように見えて、あわれに無慚むざんな光景ようすだつて。」

「……へい、そうですかね、」と云つた男衆の声は、なぜか腑ふに落ちぬらしく聞えたのである。

「聞きや、道成寺を舞つた時、腹巻の下へ蛇を緊しめた姉さんだと云うじゃないか。……その扱帯しごきが鎌首もたを擡もたげりや可よかつたのにさ。」

「まつたくですよ。それがために、貴方ね、舞の師匠から、その道成寺、葵あおいの上などとい

う執しゅうぢやく着ちやくの深いものは、立方たちかた禁制と言渡されて、破門だけは免れたツて、奥行きのあ
る婦おんなですが……金子かねの力で、旦那にや自由にならないじやなりますまいよ。」

「気の毒だね。」

「とおつしやると、筋も骨も抜けたように聞えますけれど、その癖、随分、したい三昧さんまい、
我儘わがままを、するのを、旦那の方で制し切れないツて、評判をしますかね。」

「金子でその我まをさせてもらうだけに、また旦那にも棧敷で帯を解かれるような我儘
をされるんです。身体からだを売つて榮耀えいう榮華さ、それが浅ましいと云うんじゃないか。」

「ですがね、」

と男衆は、雪駄せったちやらちやら、で、日南ひなたの横顔、小首ひねを捻つて、

「我儘も品しなによりまさ。金剛石ダイヤモンドや黄金鎖きんぐさりなら妾めかけの身じや、我儘という申立てにもなり
ませんかね。」

自動車のプウプウも血の道に触さわるか何かで、ある時やっこなんざ、奴の日傘ひなで、青葉時に、そ
れ女大名の信長公でさ。鳴かずんば鳴かして見しよう、日中ひなかに時ほととぎす鳥を聞くんだ、とい
う触ふれこ込みで、天王寺へ練込みましたさ、貴方。

幫間たいこまちが先へ廻つて、あの五重の塔の天辺てっぺんへ上つて、わなわな震えながら雲雀笛ひばりぶえ

を。はい、はどうです。

そんな我儘より、もつと偉いのは、しかもその日だつて云うんですがね。

御堂横から蓮の池へ廻る広場、大銀杏の根方に箆を敷いて、すたとん、すたとん、

と太鼓を敲いて、猿を踊らしていた小僧を、御寮人お珊の方、扇子を半開か何かで、

こう反身で見ると、（可愛らしいぼんちやな。）で、俳優の誰とかに肖てるツて御意の

上……（私は人の妾やよつて、えらい相違もないやろけれど、畜生に世話になるより、ち

つとは優や。旦那に頼んで出世させて上げる、来なはれ、）と直ぐに貴方。

その場から連れて戻つて、否応なしに、旦那を説付けて、たちまち大店の手代分。大

道稼ぎの猿廻しを、縞もの揃いにきちんと取立てたなんぞはいかがで。私は膝を突つく腕

に、ちつとは実があると思うんですが。」

初阪はこれを聞くと、様子が変わつて、

「さあ、事だよ！すると、昨夜のはその猿廻しだ。」

「いや、黒服の狂犬やまいぬは、まだ妾めかけの膝枕ひざまくらで、ふんぞり返って高たかい 鼾いびき。それさえ見てはいられないのに、……その手代に違いない。……当時の久松といったのが、前まえ 垂たれがけで、何か急用と見えて、逢いに來てからの狼藉ろうぜきが、まったく目に余ったんだ。

悪口あつこう吐くのに、（猿曳ざるひきめ、）と云ったが、それで分った。けずり廻しとか、摺古木すりこぎとか、獣めとかいう事だろう。大阪では（猿曳）と怒鳴るのかと思ったが。じゃ、そのお珊さんの方が取立てた、銀杏いちようの下したの芸人に疑いない。

となると！……あの、婦おんなはなお済まないぜ。

自分の世話をした若手代が、目の前で、額きせるを煙管たばこで打ぶたれるのを、もじもじと見ていたろうじゃないか。」

「煙管で、へい？……」

「ああ、垂たら々と血たらが出た。それをどうにもし得ないんだ。じゃ、天王寺の境内で、猿曳さるひきを拾上げたって何の功にもなりやしない。

まあね、……旦那は寝たろう。取巻けいこきの芸妓げいこ一統たがい、互たがいにほつとしたらしい。が、私に言わせりやその徒てだあって働はたらきがないじゃないか。何のための取巻なんです。ここは腕うでがあると、取仕切とりしきって、御寮人ごしやうじんに樂たのをさせる処ところさね。その柔かい膝ひざに、友染ともぞめも露出あらわになるまで、

石頭ごうもんの拷問ごうもんに掛けて、芝居で泣いていては済みそうもないんだが。

可よしき、それも。

と、そこへ、酒肴さかな、水菓子を添えて運んで来た。するとね、円鬚まげに結いった仲居らしいのが、世話をして、御連中、いずれもお一ツずつは、いい気なもんです。

さすがに、御寮人は、頭かぶりをちよつと振つて受けなかった。

それにも構しりわず……（さあ一ツ。）か何かで、美濃みのから近江おうみ、こちらの棧敷あふに溢あふれてる大きなお臀しりを、隣から手を伸のべて猪口ちよくの縁ふちでコトコトと音信おとづれると、片手で簪かんざしを撮つまんで、ごしごしと鬢びんの毛つツを突搔つかき突搔つかき、ぐしやりと挫ひしやけたように仕切もたに凭もたれて、乗出して舞台を見い見い、片手を背後うしろへ伸ばして、猪口ちよくを引ひつゝ傾かたむけたまま受ける、注つぐ、それ、溢こぼす。（わややな、）と云う。

そいつが、私の胸の前で、手と手を千鳥はしまがけに始はじまったんだから驚くだろう。御免も失礼も、会釈一つするんじゃない。

しかし憎くはなかったぜ。君の親方が舞台に出ていて、皆みんなが夢中みんで遣る事なんだ。憎いのは一人狂犬やまいぬさ。

やつと静まつたと思う間もない。

(酒か、)と喚くと、むくむくと起かかつて、引担ぐような肱の上へ、妾の膝で頭を載せた。

(注げ! 馬鹿めが、)と猪口を叱つて、茶碗で、苦い顔して、がぶがぶと掻喫う処へ、……色の白い、ちと纖弱い、と云つた柄さ。中脊の若いのが、縞の羽織で、廊下をちよこちよこ来て、ト手をちやんと支いた。

(何や、)と一ツ突慥貪に云つて睨みつけたが、低声で、若いのが何か口上を云うのを、フーフーと鼻で呼吸をしながら、目を瞑つて、真仰向けに聞いたもんです。

(旦那の、)旦那と云うんだ。(旦那のここに居るのがどないして知れた、何や、)とまた怒鳴つて、(判然ぬかしおれ。何や? 番頭が……ふ、ふ、ふん、)と嘲けるよ。うな、あの、凄い笑顔。やがて、苦々しうに、そして切なうに、眉を顰めて、唇を引結ぶと、グウグウとまた軒を搔出す。

いや、しばらく起きない。

若手代は、膝へ手を支いたなり、中腰でね、こう困つたらしく俯向いたツきり。女連は、芝居に身が入つて言も掛けず。

その中に幕が閉つた。

満場わツと鳴つて、ぎつしり詰つたのが、真黒に両方の廊下へ溢れる。

しばらくして、大分鎮まつた時だつた。幕あきに間もなさそうで、急足になる往來の中を、また竹の扉からひよいと出たのは、娘を世話した男衆でね。手に弁当を一つ持つていました。

（はいよ、お弁当、）と云つて、娘に差出して、渡そうとしたつけが……」

十一

「そこに私も居る、……知らぬ間に肥満女の込入つたのと、振向いた娘の顔とを等分に見較べて（和女、極が悪いやろ。そしたら私が方へ来て食ひなはるか。ああ、そうしなはれ、）と莞爾々々笑う、気の可い男さ。（太いお邪魔にござります。）と、屈んで私に挨拶して、一人で合点して弁当を持ったまま、ずいと引退つた。

娘がね、仕切に手を支くと、向直つて、抜いた花簪を載せている、涙に濡れた、細り畳んだ手拭を置いた、友染の前垂れの膝を浮かして、ちよつと考えるようにしたつけ。その手拭を軽く持つて、上気した襟のあたりを二つ三つ煽きながら、可愛い足袋で、腰を

据えて、すつと出て行く。……

私は煙草^{たばこ}がなくなつたから、背後^{うしろ}の運動場^{うんどうば}へ買いに出た。

余り見かねたから、背後^{うしろ}向きになつていたがね、出しなに見ると、狂犬^{やまいぬ}はそのまま膝枕^{ひざまくら}で、例の軒^{のき}で、若い手代はどこへ立つたか居なかつた。

西の運動場には、店が一つしかない。もう幕が開く処、見物は残らず場所へ坐^{すわり}直し^{なお}している、ここらは大坂は行儀が可いよ。それに、大人で、身の入った芝居ほど、運動場は寂しいもんです。

風は冷^{つめた}し、呼吸^{いき}ぬきかたがた、買った敷島をそこで吸附^ふけて、喫^くかしながら、堅^{うす}い薄^へ縁^りの板の上を、足袋の裏冷^{ひやひや}々と、快^いい心持で^{すべ}迂^うらして、懷^{くわ}手で、一人で棧敷^{せき}へ歸^{かへ}つて来ると、斜^{はす}違^{ちが}いに薄暗^{はくあん}い便所が見えます。

そのね、手水鉢^{ちようずばち}の前に、大な影法師見るように、脚^{きゃ}榻^{たつ}に腰を掛けて、綿^{わた}の厚い寝^ね寝^ね子^こで踞^{うずくま}つてるのが、何だつけ、君が云つた、その伝五郎。」

「ぼけましたよ、ええ、娼^{しや}婆^ば気な駕籠屋^{がらごや}でした。」

「まったくだね、股^{もも}引^ひの裾^{すそ}をぐい、と端折^{はしよ}つた処は豪勢^{ごうせい}だが、下腹^{げはら}がこけて、どんつくの庄^{おし}に打たれて、猫背^{ねこせ}にへたへたと滅入^{めいり}込んで、臍^{へそ}から頤^{おとがい}が生えたようです。

十四五枚も、堆く懷に疊んで持った手拭は、汚れてはおらないが、その風だから手拭きに出してくれるのが、鼻紙の配分をするようさね、潰れた古無尽の帳面の亡者にそっくり。

一度、序幕のはじめに行つて、手を洗つた時、そう思つた。

小さな銀貨を一個握らせると、両手で、頭の上へ押頂いて、（沢山に難有、難有、難有、）と懷中へ頤を突込んで礼をするのが、何となく、ものの可哀が身に染みた。

その爺さんがね、見ると……その時、角兵衛という風で、頭を動かす……坐睡りか、と思うと悶いたんだ。仰向けに反つて、両手の握拳で、肩を敲こうとするが、ひつつるばかりで手が動かぬ。

うん、と云う。

や、老人の早打肩。危いと思つた時、幕あきの鳴ものが、チャンと入つて、下座の三味線が、ト手首を口へ取つて、湿をくれたのが、ちらりと見える。

どこか、もの蔭から、はらはらと走つて出たのはその娘で。

突然、爺様の背中へ掴まると、手水鉢の傍に、南天の実の撓々と、霜に伏さつた冷い緋鹿子、真白な小腕で、どんつくの肩をたたくじやないか。

青^{あお}苔^{こけ}の緑^{ろく} 青^{あお}がぶくぶく禿^はげた、湿^しった貼^{のり}の香^かのぷんとする、山の書割^{しやわり}の立て掛け
である暗^くい処^{ところ}へ凭^{よつ}懸^かつて、ああ、さすがにここも都^{みやこ}だ、としきりに可^な懐^{つか}く熟^{じつ}と視^みた。
そこへ、手水鉢^{てすいひつ}へ来て、手を洗^{あら}ったのが、若い手代^{てしろ}——君^{きみ}が云^いう、その美少年^{みせうねん}の猿^{さる}
廻^し。」

十二

「急^{いそ}いで手拭^{てふき}を懐^{ふとこ}中^{ちゆう}へ突^つ込^こむと、若^わ手代^{てしろ}はそこいらしきりに前^{まへ}後^ごを^あし^とき^きに^みま^わした、……私^{わたし}は
書割^{しやわり}の山の陰^{かげ}に潜^{ひそ}んでいたろう。

誰^{たれ}も居^いないと見^み定めると、直^{ただ}ぐに、娘^{むすめ}をわきへ推^{おし}遣^やつて、手代^{てしろ}が自分で、爺^{じい}様^{さん}の肩^{かた}を
敲^{たた}き出^だした。

二人^{ふたり}はいい中で居^いるらしい、一目^{ひとめ}見て様子^{ようす}で知^しれる、」

「ほう、」

と唐^{たし}突^{ぬけ}に声^{こゑ}を揚^あげて、男衆^{おとこしゆう}は小溝^{せうこう}を一つ向^{むか}うへ跳^はんだ。初^{はつ}阪^{はん}は小^{せう}さな石橋^{いしはし}を渡^わつた時^{とき}。
「私^{わたし}は旅^{たび}行^{ぎやう}をした効^{かい}があると思^{おも}つた。

声は届かないけれども、趣でよく分る。……両手を働かせながら、若手代は、顔で教えて、ここは可い、自分が介抱するから、あっちへ行つて芝居を見るように、と勧めるんです。娘が肯かないのを、優しく叱るらしく見えると、あいあいと頷く風でね、老年を勤る男の深切を、嬉しそうに、二三度見返りながら、娘はいそいそと棧敷へ帰る。その竹の扉を出る時、ちよつと襟を合せましたよ。

私も帰った。

間もなく、何、さしたる事でもなかったろう。すぐに肩癖は解れた、と見えて、若い人は、隣の棧敷際へ戻つて来て、廊下へ支膝、以前のごとし。……

真中へ挟つた私を御覧。美しい絹糸で、身体中かがられる、何だか擦い氣持に胸が緊つて、妙に窮屈な事といったらない。

狂犬がむっくり、鼻息を吹直した。

(柿があるか、剥けやい、)と涎で滑々した口を切つて、絹も膚にくい込もう、長い間枕した、妾の膝で、真赤な目を睜くと、手代をじろり、さも輕蔑したように見て、(何しとる? 汝や!)と口汚く、まず怒鳴つた。

(何じゃ、返事を待つた、間抜け。勘定欲しい、と取りに來た金子なら、払うてやるは知れ

た事や。何吐す。……三百や五百の金。うんも、すんもあるものかい、鼻かんで敲きつけろ、と番頭にそう吐かせ。）

（はい、）と、手を支く。

（さつさと去ね、こない場所へのこのこと面出しおつて、何さらす、去ねやい。）

（はい、）とそれでも用済み。前垂の下で手を揉みながら、手代が立って、五足ばかり行きかかると、

（多一、多一、）と呼んだ。若い人は、多一と云うんだ。

（待てい、）と云う。はつと引返して、また手を支くと、婦の膝をはらばいに乗出して、

（何じやな、向うから金子くれい、と使が来て店で待つじやな。人寄越いたら催促やい。

誰や思う、丸官、）と云つたように覚えている。……」

「ええ、丸田官蔵、船場の大金持です。」

「そうかね、（丸官は催促されて金子出した覚えはない。へへん、）と云つて、取巻の芸妓徒の顔をずらりと見渡すと、例の凄いで嘲笑つて、軍鶏が蹴つけるように、ポンと起きたが、（寄越せ、）で、一人剥いていた柿を引手繰る、と仕切に肱を立てて、顔を、新高に居るどこかの島田髷の上に突出して、丸嚙りに、ぼりぼりと喰かきながら、

（留めちまえ、）と舞台へ喚く。

御寮人は、ぞろりと棲を引合せる。多一は、その袖の蔭に、踞っていたんだね。

するとね、くいほじった柿の核を、ぴよいぴよいと棧敷中へ吐散らして、あはは、あはは、と面相の崩れるばかり、大口を開いて笑ったつけ。

（鉄砲打て、戦争押始めろ。大砲でも放さんかい、陰気な芝居や、馬鹿、）と云うと、また急に、険しい、苦い、尖った顔をして、じろりと多一を睨みつけた。

（何しとる、うむ、）と押潰すように云います。

（それでは、番頭さんに、その通り申聞けますでございます、）とまた立って、多一が歩行き出すと（こら！）と呼んで呼び留めた。

（丁稚々々、）と今度は云うのさ。」

聞く男衆は歎息した。

「難物ですなあ。」

「それからの狂^{やまいぬ}犬が、条理^{すじ}違いの難題といつちや、聞いていられなかつたぜ。

(汝^{わり}や、はいはいで、用を済まいた顔^{がにしよく}色で、人間並に棧敷裏を足ばかりで立つて行くが、帰つたら番頭に何と云うて返事さらすんや。何や！ 払うな、と俺が吩咐^{いいつ}けたからその通り申します、と申しますが、呆れるわい、これ、払うべき金子^{かね}を払わいで、主人の一分が立つと思うか。(五百円や三百円、)と大^{おお}な声して、(端^{はした}金子、)で、底力を入れなすて塗りつけるように声を密^{ひそ}めて……(な、端金子を、ああもこうもあるものかい。俺が払うな、と言^いうたかて払え。さつさと一束にして突付けろ。帰れ！ 大^{おお}白痴^{おたわけ}、その位な事が分らんか。)

で、また追^{おつた}立てて、立掛ける、とまたしても、(待ちおれ。)だ。

(分つたか、何、分つた、偉い！ 出^で来^かす、)と云つてね、ふふん、と例の厭^{いや}な笑^{わらい}方^{かた}をして、それ、直ぐに芸妓^{げいこ}連^{れん}の顔をぎよろり。

(分つたら言^いうてみい、帰^{かえ}つて何と返事をする、饒舌^{しゃべ}れ。一応は聞いておく。丸官後学のために承^{うけ}りたい、ふん、)と鼻を仰^{あおむ}向けに耳を多一に突附けて、そこにありあわせた、御寮^{きんぎせ}人の黄金煙管^{きんぎせ}を握^{にぎ}つて、立続^{たつづ}けに、ふかふか吹^ふかす。

(判^{はつきり}然言^いえ、判^{はつきり}然、ちゃんと口上をもつて吐^ぬかせ。うん、番頭に、番頭に、番頭に、何

だ、金子^{かね}を払え?……黙れ! 沙汰過ぎた青二才、)と可^お恐^そい顔になった。(誰^{たれ}が?)と吠^ほえるような声で、(誰^{たれ}が払えと言った。誰^{たれ}が、これ、五百円は大金だぞ!

丸官、たかを聞いてさえぶるぶるする。これ、この通り震えるわい。)で、胴肩^{けん}を一つに揺^ゆり上げて、(大胆^{たん}ものめが、土性骨^{どせいこ}の太い奴^{やつ}や。主人^{しゅじん}のものだとたかを括^{くく}つて、大金を何^{なん}の糟^{かす}とも思^{おも}いくさらん、乞食^{こじき}を忘^{わす}れたか。)

と言う。

目に涙を一杯ためて、(御免^{ごめん}下さいまし、)と、退^すつて廊下^{らうか}へ手を支^たくと、(あやまるに及^{およ}ばん、よく、考^{かん}えて、何^{なん}と計^{けい}らうべきか、そこへくい附^ついて分別^{ぶんべつ}して返答^{へんた}せい。……石^{いし}になるまで、汝^わや動^うくな。)とまた柿^{かき}を引手^ひ繰^くつて、かつかつと喰^くいかきながら、(止^やめちまえ、馬鹿^{ばか}、)と舞台^{ぶたい}へ怒鳴^{どなり}る。

(旦那様^{だんなさま}、旦那様^{だんなさま}、)多^{おほ}一^{いっ}が震^{ふる}声^{こゑ}で呼^よんだと思^{おも}え。

(早い^{はやい}な、汝^わがような下根^{げこん}な奴^{やつ}には、三年^{さんねん}かかろうと思^{おも}うた分別^{ぶんべつ}が、立^{たち}処^{どころ}は偉^{おれ}い。俺^{おれ}を呼^よぶからには工夫^{くふう}が着^きいたな。まず、褒美^{ほうび}を遣^はる。そりや頂^{ちやう}け、)と柿^{かき}の蒂^{へた}を、色白^{いろしろ}な多^{おほ}一の頬^ほへたたきつけた。

(もし、御寮人様^{ごりやうじんさま}、)と熟^{じつ}と顔^{かほ}を見て、(どうしましたら宜^{よろ}しいのでございましょう、)

と縋^{すが}るようにして言ったか言わぬに、（猿^{ざる}曳^{ひき}め、汝^{われ}や、婦^{おんな}に、……畜^{ちく}生^{せい}、）と喚^{わめ}くが疾^{はや}いか、伸^の掛^{しか}つて、ピシリと雁^{がん}首^{くび}で額^{がく}を打^ぶったよ。羅^ら宇^うが真^ま中^{なか}から折^よれた。

こちらの棧^{せき}敷^{しき}に居^いた娘^{むすめ}が、誰^{たれ}より先^{まづ}に、ハツと仕^し切^きへ顔^{かお}を伏^ふせる、と氣^きを打^うたれたか、驚^{おどろ}いた顔^{かお}をして、新高^{しんこう}の、ちようど下に居^いた一人^{ひとり}商人^{しょうじん}風^{ふう}の男^{おとこ}が、中^{ちゆう}腰^{よう}に立^たつて上^{うへ}を見^みた。

芸^げ妓^ぎ達^{たち}も一^{いつ}時^{とき}に振^ふ向^{むか}いて目^めを合^あせた、が、それだけさ。多^{おほ}一^きが圧^{おさ}えた手^ての指^{さき}から、たらたらと糸^{いと}すじのように血^ちの流^{なが}れるのを見^みたばかり、どうにも手^てのつけようがなさそうな容^{よう}子^すには弱^{よわ}ったね。おまけに知^しらない振^ふを^りして、そのまま芝^{しば}居^いを見る姉^{あね}さんがあるじやないか。

私は、ふいと立^たつて、部^ぶ屋^やへ歸^{かへ}った。

傍^{そば}に居^いちや、もうこつちが撮^{つま}出^{みだ}されるまでも、横^{よこ}面^{めん}一^{いち}ツ打^{うち}挫^{ひしや}がなくツては、新^{しん}橋^{きよはし}へ歸^{かへ}られまい。が、私^{わたし}が取^と組^{くみ}合^あった、となると、随^{ずい}分^{ぶん}舞^ま台^{だい}から飛^とんで来^きかねない友^{とも}だちが一人^{ひとり}居^いるんだからね。

頭痛^{ずつう}がする、と楽^{らく}屋^やへ横^{よこ}になつたツきり、あとの事^{こと}は知^しりません。道^{みち}頓^{とん}堀^{ぼり}で、別^{べつ}に半^{はん}鐘^{しょう}を打^うたなかつたから、あれなり、ぐしやぐしやと消^きえたんだろう。

その婦^{おんな}だ、呆^{おろ}れたぐうたらだと思^{おも}つたが、」

「もし、もし、」

と男衆が、初阪の袖を、ぐい、と引いた。

十四

歩^{ある}行くともなく話しながらも、男の足は早かった。と見ると、二人から十四五間、真^{まつす}直^ぐに見渡す。——狭いが、群^{ぐん}集^{じゆ}の夥^{おび}しい町筋を、斜^やめに奴^{やつこ}を連れて帰る——二個^{ふたつ}、前^{あと}後^{さき}にすつと並んだ薄色の洋傘^{こうもり}は、大輪^{ふよう}の芙蓉^{ふよう}の太陽^ひを浴びて、冷たく輝くがごとくに見えた。

水打^{つち}った地^{もすそ}に、裳^{あや}の綾^さの影も射^さす、色は四辺^{あたり}を払^はったのである。

「やあ、居る……」

と、思わず初阪^{すきま}が声を立てる、ト両側^{ひとだち}を詰めた屋^かごとの店、累^{かさな}り合^あつて露店もあり。軒^{のき}にも、路^{みち}にも、透^{すきま}間^まのない人^{ひと}立^{たち}したが、いずれも言^い合^あせたように、その後姿^{くた}を見送^{おん}つていたらしいから、一見^あ赤毛^{あか}布^ふのその風采^{ふうさい}で、慌^{あわ}しく（居る、）と云^いえば、件^{くだん}の婦^{おんな}に吃^{びつ}驚^{おどろ}した事は、往^{ゆき}来^きの人の、近間^{きんま}なものには残^{のこ}らず分^わつた。

意気な案内者大に弱って、

「驚いては不可いけません。天満の青物市です。……それ、真正面に、御鳥居を御覧なさい。」

はじめて心付くと、先刻視めた城に対して、稜威は高し、宮居の屋根。雲に連なる麓の棟は、玉を刻んだ峰である。

向つて鳥居から町一筋、朝市の済んだあと、日蔽の葭簀を払った、両側の組柱は、鉄橋の木賃に似て、男も婦も、折から市人の服装は皆黒いのに、一ツ鮮麗あざやかに行く美人の姿のために、さながら、市松障子の屋台した、菊の花壇のごとくに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突然入つたから驚いたんです。」

「そうでしょう。」

擦違すれちがった人は、初阪もの顔を見て皆笑わらいを含む。

ふたり
両人は苦笑した。

「ほっこり、暖い、暖い。」

蒸芋ふかしいもの湯気の中に、紺の鯉口こいぐちした女房が、ぬつくりと立って呼ぶ。

「おでんや、おでん！」

「餛飩あがんなはらんか、餛飩。」

「煎餅買いなはれ、買いなはれ。」

鮓の香気が芬として、あるが中に、硝子戸越の紅は、住吉の浦の鯛、淡路島の蝦である。市場の人の紺足袋に、はらはらと散った青い菜は、皆天王寺の蕪と見た。……類被したお百姓、空籠荷うて行違う。

軒より高い競売もある。

傘さした飴屋の前で、奥深い白木の階に、二人まず、帽子を手に取った時であつた。――前途へ、今大鳥居を潜るよと見た、見る目も彩な、お珊の姿が、それまでは、よわよわと気病の床を小春日和に、庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たよう、扱帯で棲取らぬばかりに、日の本の東西にただ二つの市の中を、徐々と拾ったのが、たちまち電のごとく、颯と、照々とある円柱に影を残して、鳥居際から衝と左へ切れた。

が、目にも留まらぬばかり、掻消すがごとくに見えなくなつた。

高く競売屋が居る、古いが、黒くがっしりした屋根越の其方の空、一点の雲もなく、冴えた水色の隈なき中に、浅葱や、樺や、朱や、青や、色づき初めた銀杏の梢に、風の戦ぐ、と視めたのは、皆見世ものの立幟。

太鼓に、鉦かねに、ひしひしと、打寄する跽音あしおとの、遠巻きめいて、遙はるかに淀川にも響くと聞きしは、誓文払いに出盛る人数にんず。お珊も暮るれば練るという、宝の市の夜よをかけた、大阪中の賑にぎわいである。

十五

「御覧なさい、これが亀の池です。」

と云う、男衆の目は、——ここに人を渡すために架かけたと云うより、築山つきやまの景色に刻んだような、天満宮てんまんぐうの境内を左へ入って、池を渡る橋の上で——池は視みないで、向う岸へ外それた。

階きざはしを昇ひざまずって跪ひざまずいた時、言い知らぬ神霊に、引緊ひきしまった身の、拍手かしわでも堅く附着くつついたのが、このところまで退まかんで出たなそこて、やつと掌の開くを覚えながら、岸に、そのお珊たらずのイんだのを見たのであった。

魅ふでも投げたか、奴やつこと二人で、同じ状さまに洋傘こうもりを傾けて、熟じつと池の面おもを見入っている。初阪は、不思議な物語に伝える類たぐいの、同じ百里の旅人である。天満の橋を渡る時、ふと

どこともなく立^{たちあらわ} 顕^{あらわ}れた、世にも凄^{すげ}いまで美しい婦^{おんな}の手から、一通^{たますき}玉章^{たますき}を秘^ひめた文箱^{ふばこ}を託^{たく}つて来て、ここなる池で、かつて暗示^{あんし}された、別^{わか}な美人^{たおやめ}が受取^{うけと}りに出^でたような気がしてならぬ。

しかもそれは、途中^{ちうちう}互^{たがい}にもの言うにさえ、声の疲^{つか}れた……激^{おどろ}しい人の波^{なみ}を泳^{およ}いで来^きた、殷^{いん}賑^{しん}、心齋^{しんさい}橋^{ばし}、高麗^{こうらい}橋^{ばし}と相並^{あひび}ぶ、天満^{てんまん}の町筋^{ちうぢん}を徹^{とお}してであるにもかかわらず、説^せき難^{なん}き一種^{いっしゆ}寂寞^{せきばく}の感^{かん}が身^みに迫^{せま}つた。参^{さん}詣^{けい}群集^{ぐんじゆ}、隙間^{ひま}のない、宮^{みや}、社^{やしろ}の、フトした空地^{くうち}は、こうした水ある処^{ところ}に、思^{おも}ひかけぬ寂^{ひな}しさを、日中^{ひな}は分^わけて見^みる事^{こと}がおりおりある。

ちやうど池^{いけ}の辺^{ほとり}には、この時^{とき}、他^{ほか}に人影^{じんぎやう}も見^みえなかつた。……

橋^{はし}の上に小兒^{こども}を連^つれた乳母^{によう}が居^ゐたが、此方^{こなた}から連立^{れんりつ}つて、二人^{ふたり}が行^{ゆき}掛^かつた機^し會^おに、「さあ、のの様^{さま}の方^{かた}へ行^いこか。」と云^いつて、手^てを引^ひいて、宮^{みや}の方^{かた}へ徐^そ々^そ歸^{かへ}つた。その状^{さま}が、人間界^{にやうかい}へ立^た歸^{かへ}るごとくに見^みえた。

池^{いけ}は小さくて、武蔵野^{むさしの}の埴^は生^{ゆう}の小屋^{こや}が今^{いま}あらば、その潦^{にわた}ばかりだけれども、深^{ふか}翠^{みどり}に萌^も黄^{えい}を累^{かさ}ねた、水^{みづ}の古^{ふる}さに藻^もが暗^くく、取廻^{とほ}わした石垣^{いしぎ}も、草^{くさ}は枯^{かわ}れつつ苔滑^{こけなめ}。牡丹^{ぼたん}を彫^うらぬ欄干^{らんかん}も、巖^{いわ}を削^おつた趣^{おもむき}がある。あまつさえ、水底^{みなさこ}に主^{ぬし}が棲^すむ……その逸^{えき}するのを封^{ふう}ずるために、雲^{うみ}に結^{ゆわ}えて鉄^{てつ}の網^{あみ}を張^はり詰^{しめ}めたように、百千^{ひゃくせん}の細^こな影^{かげ}が、漣^{さざなみ}立^たつて、ふらふ

らと数知れず、薄黒く池の中に浮いたのは、亀の池の名に負える、水に充満た亀なのであつた。

枯蓮もばらばらと、折れた茎に、トただ一つ留つたのは、硫黄ヶ島の赤蜻蛉。

鯉の背は翻々と、お珊瑚の裳の影に靡く。

居たのは、つい、橋の其方であつた。

半襟は、黒に、蘆の穂が幽に白い、紺地によりがらみの細い格子、お召縮緬の一枚小袖、ついわざとらしいまで、不断着で出たらしい。コオトも着ない、羽織の色が、派手に、渋く、そして際立つて、ぱつと目についた。

髪つやの艶も、色の白さも、そのために一際目立つ、——糸織か、一楽らしいくすんだ中に、晃々きらきらと冴えがある、きつぱりした地の藍鼠あいにずみに、小豆色と茶と紺と、すらすらと色の通つた縞しまの乱立。

蒼空あおぞらの澄んだのに、水の色が袖に迫つて、藍は青に、小豆は紅に、茶は萌黄に、紺は紫の隈くまを染めて、明い中に影さすばかり。帯も長襦袢もこれに消えて、山深き処、年古る池に、ただその、すらりと雪を束ねたのに、霧ながら木の葉に綾なす、虹を取つて、細く滑かに美しく、肩に掛けて背に捌き、腰に流したようである。汀は水を取廻わして、冷い

若木の薄もみじ。

光線は白かった。

十六

その艶えんなのが、女の童めわらわを従やっえた風で、奴こたとイむ。……汀たぎに寄つて……流木ながれぎめいた板が一枚、ぶくぶくと浮いて、苔塗こけまみれに生簀いけすの蓋ふたのように見えるのがあった。日は水を劃くぎつて、その板の上ばかり、たとえば温かさを積重ねた心持にふわふわ当る。

それへ、ほかほかと甲こうらを干した、木の葉こに交つて青銭の散つた状さまして、大小の亀は十と二十、磧かわらの石の数々居た。中には軽石のごときが交つて。――

いづれ一度は擒とりことなつて、供養にとて放された、が狭い池で、昔売買うりかいをされたという黒奴くろんぼの男女なんによを思出させる。島、海、沢、藪やぶをかけた集り勢、これほどの数が込合つたら、月には波立ち、暗夜やみには潜ひそんで、ひそひそと身の上話がはじまろう。

故郷ふるさとなる、何を見るやら、向むきは違つても一つ一つ、首を据えて目を睜みはる。が、人も、もの言わず、活いきものがこれだけ居て余りの静かさ。どれかが幽かすかに、えへん、と咳せき払ばらいを

しそ^{さみ}うで寂しい。

一頭^{ひとつ}、ぬつと、ざらざらな首を伸ばして、長く反^そつて、汀を仰いだのがあつた。心は、初阪等二人と齊^{ひと}しく、絹糸の虹を視^{なが}めたに違いない。

「気味の悪いもんですね、よく見るといかにも頭つきが似ていますぜ。」

男衆は両手を池の上へ出しながら、橋の欄干に凭^{もた}れて低声^{こごえ}で云う。あえて忍音^{しのびね}には及ばぬ事を。けれども、……ここで云うのは、直^{じか}に話すほど、間近な人に皆聞える。

「まったく、魚^{うお}じや鰻^{ぼら}の面^{かお}色が瓜二つだよ。」

その何に似ているかは言わずとも知れよう。

「ああああ、板の下から潜^{もぐり}出して、一つ水の中から顕^{あらわ}れたのがあります。大分大きゅうがすせ。」

成程、たらたらと漆^{うるし}のような腹を正^ま的に、甲^{こう}に濡色の薄紅^{うすべに}をさしたのが、仰^{あおむ}向けに鰓^{あぎ}を此方^{こなた}へ、むつくりとして、そして頭の尖^{さき}に黄色く輪取^なつた、その目^なが凸^なにくるりと見え、鱗^{うろこ}のざらめく蒼味^{あおみ}がかった手を、ト板の縁^{ふち}へ突張^{つっぱ}つて、水から半分ぬい、と出た。

「大将、甲羅干^{こうら}しに板へ出る気だ。それ乗ります。」

と男衆の云つた時、爪が外れて、ストンと落ちた。

が、直ぐにすぼりと胸を浮かす。

「今度は乗るぜ。」

やがて、甲羅を、残らず藻の上へ水から離して踏張^{ふんば}った。が、力足らず、乗出した勢^{いきおい}が余つて、取外ずすと、ずんと沈む。

「や、不可^{いけな}い。」

たちまち猛然としてまた浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い体を伸上^{のしあ}げる。

「しっかりしつかり、今度は大丈夫。あ、また^{すべ}に^{すべ}った。大事な処で。」と男衆は胸を乗出す。

汀のお珊は、棲^{つま}をすらりと足をちよいと踏替えた。奴島^{やつこしまだ}田は、洋傘^{こうもり}を畳んで支^ついて、直ぐ目の下を、前髪^{てびさし}に手庇^{のぞきこ}して覗^{のぞ}込む。

この度は、場処を替えようとするらしい。

斜^{ななめ}に甲羅を、板に添つて、手を掛けながら、するすると泳ぐ。これが、棹^{さお}で操^さるがごとくになつて、夥多^{あまた}の可心^{いい}持に乾いた亀の子を、カラカラと載^のせたままで、水をゆらゆらと流れてに^じつた。が、熟^{じつ}として噓^{くしゃみ}したもの一つない。

板の一方は細いのである。

そこへ、手を伸ばすと、腹へ抱込めそうに見えた。

いや、困った事は、重量に圧されて、板が引傾いたために、だふん、と潜る。

「ほい、しまった。いや、串戯じゃない。しつかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトントン叩く。

あせる、と見えて、むらむらと紋が騒ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り探り手が掛つた。と思うと、ずぼりと出る。

「蛙だと青柳硯と云うんです。」

「まったくさ。」

十七

けれども、その時もし遂げなかった。

「ああ、惜い。」

男衆も共に、ただ一息と思う処で、亀の、どぶりと沈むごとに、思わず声を掛けて、手

のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げてやりたい。が、もう弱ったかな。」

と言う間もなかった。

この時は、手の鱗も逆立つまで、しゃつきりと、爪を大きく開ける、と甲の揺ぐばかりが入って、その手を扁平く板について、白く乾いた小さな亀の背に掛けた。

「ははあ、考えた。」

「あいつを力に取って伸上るんです、や、や、どっこい。やれ情ない。」

ざぶりと他愛なく、たわい 見た目もや沈む。

男衆が時計を視た。み

「もう二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々そろそろ帰りましょう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないじや氣が残るようだね。」

「え、私も氣になりますがね、だって、日が暮れるまで掛るかも知れませんから。」

「妙に残惜のこりおしいようだよ。」

男衆は、汀みぎわの婦にちよいと目を遣って、密そつと片頬笑かたほおえみして声を潜ひそめた。

「串^{じようだん} 戯^す じやありませんぜ。ね、それ、何だか薄^{うつつ}りと美しい五色の霧が、冷^{ひやひや}々と掛^かるようです。……変^{すこ}に凄^{すこ}いようですぜ。亀が昇天するのも知れません。板に上ると、その機会^{はすみ}に、黒雲を捲^{まきおこ}起^{おこ}して、震動雷電……」

「さあ、出掛^{でかけ}けよう。」

二人は肩を寒くして、コトコトと橋の中央^{ななかば}から取つて返す。

やがて、渡^{わたり}果^はてようとした時である。

「ちよつと、ちよつと。」

と背後^{うしろ}から、優^{やさし}いが張^{はり}のある、朗かな、そして幅のある声して呼んだ。何等^{しきい}の仔細^{しさい}なしには済むまいと思つた半日。それそれ、言わぬ事か、それ言わぬ事か。

袖を合せて、前後^{あとさき}に、ト齊^{ひと}しく振返ると、洋傘^{こうもり}は畳んで、それは奴^{やつこ}に持たした。纏^も毛^{つれ}一條もない黒髪は、取つて捌^{さば}いたかと思うばかり、瘦^{やせ}ぎすな、透通^{とおと}るような頬を包んで、正面^{まとも}に顔を合せた、襟はさぞ、雪なす咽喉^{のど}が細かつた。

「手前どもで、」と男衆は如才ない会釈をする。

奴は黙つて、片手をその膝のあたりへ下げた。

「そうです。」と判然^{はつきり}云つて莞爾^{にっこり}する、瞼^{まぶた}に薄く色が染まつて、類^{たぐい}なき紅葉^{もみじ}の中^{おもかげ}の倅^は

である。

「一遍お待ちやす……思を遂げんと気がかりなよつて、見ていておくれやす。私が手伝うさかいな。」

猶予いあえず、バチンと蓮の果の飛ぶ音が響いた。お珊は帶留の黄金金具、緑の照々と輝く玉を、烏羽玉の夜の帯から星を手取るよ、と自魚の指に外ずして、見得もななく、友染を柔な膝なりに、腰をなよなよと汀に低く居て——あたかも腹を空に突張つてによいと上げた、藻を押分けた——亀の手に、縋れよ、引かむ、とすらりと投げた。

帶留は、銀の曇つたような打紐と見えた。

その尖は水に潜つて、亀の子は、ばくりと紐を噛む、ト袖口を軽く袂を絞つた、小腕白く雪を伸べた。が、重量がかかるか、引く手に幽に脈を打つ。その二の腕、顔、襟、頸、膚に白い処は云うまでもない、袖、褌の、艶に色めく姿、爪尖まで、——さながら、細い黒髪の毛筋をもつて、線を引いて、描き取った姿絵のようであつた。

池の面は、蒼く、お珊の唇のあたりに影を籠めた。

風少し吹添って、城ある乾の天暗く、天満宮の屋の棟が淀り曇った。いずこともなく、はたはたと帆を打つ響きは、幟の聲、町には黄なる煙が走ろう、数万人の形を掠めて。：この水のある空ばかり、雲に硝子を嵌めたるごとく、美女の虹の姿は、姿見の中に映るかと、五色の絹を透過して、色を染めた木の葉は淡く、松の影が颯と濃い。

打紐にまた脈を打って、紫の血が通うばかり、時に、腕の色ながら、しろじろと鱗が光って、その友染に搦んだなりに懷中から一条の蛇の蛇り出た、思いかけず、ものの凄じい形になった。

「あ、」

と云う声して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、光を消して、亀の口に銜えたまま、するするする、と水脚を引いてそのまま底に沈んだのである。

奴はじりじりと後に退った。

お珊は汀にすつくと立った。が、血が留って、俤は瑪瑙の白さを削ったのであった。

この婦が、一念懸けて、すると云うに、誰が何を妨げ得よう。

日も待たず、その翌の日の夕暮時、宝の市へ練出す前に、——丸官が昨夜芝居で振舞つ

た、酒の上の暴虐ぼうぎやくの負債おひめを果させるため、とあつて、——南新地の浪屋の奥二階。金き屏風びんぶうを引繞ひきめぐらした、四海波静しかいなみずかに青畳の八畳で、お珊かん自分みづかに、雌蝶めちよう雄蝶おちようの長柄ながえを取つて、橘活たちばなけた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云う、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据えたのである。

晴の装束は、お珊かんが金子かねに飽あかして間に合わせた、宝の市の衣裳であつた。

まず上席のお美津を謂いおう。髪は結いたての水の垂るるような、十六七が潰つぶし島田。前髪をふつくり取つて、両端へはらりと分けた、遠山の眉にかかる柳の糸の振分は、大阪に呼んで（いたずら）とか。緋縮緬ひぢりめんのかけおろし。橘に実を抱かせた筈こうがいを両方に、雲井の薫かおりをたきしめた、烏帽子えぼし、狩衣かりぎぬ。朱総しゆぶさの紐は、お珊かんが手にこそ引結うたれ。着つけは桃うすがすみに薄霞ときいろぎぬ、朱鷺色ときいろぎぬ絹に白い裏はだえ、膚くの雪の紅くれないかさねの襲なまめに透くよう媚なまめかしく、白の紗しやの、その狩衣くろじゆすを装い澄まして、黒縹くろしゆす子の帯、箱文庫。

含羞はなじろむ臉まぶたを染めて、玉の項うなじを差俯さしうつむ向く、ト見ると、雛鶴ひなづる一羽、松の羽衣かいと搔取つて、曙あけぼのの雲の上なる、宴うたげに召さるる風情がある。

同じ烏帽子、紫の紐を深く、袖を並べて面伏おもふせそうな、多一は浅葱紗あさぎしやの素袍すおう着て、白衣やくえの袖を肅つつましやかに、膝に両手を差置いた。

前なるお美津は、小鼓に八雲琴、六人ずつが両側に、ハオ、イヤ、と拍子を取つて、
金蔴絵に銀鉾打った欄干づき、輻も漆の車屋台に、前囃子とて楽を奏する、その
十二人と同じ風俗。

後囃子が、また幕打った高い屋台に、これは男の稚児ばかり、すり鉾に太鼓を合わせ
て、同じく揃う十二人と、多一は同じ装束である。

二人を前に、銚子を控えて、人交ぜもしなかつた……その時お珊の装は、また立勝
つて目覚しや。

十九

宝の市の屋台に付いて、市女また姫とも称うる十二人の美女が練る。……
練衣小桂の紅の袴、とばかりでは言足らぬ。ただその上下を装束くにも、支度の
夜は丑満頃より、女紅場に顔を揃えて一人々々沐浴をするが、雪の膚も、白脛も、
その湯は一人ずつ紅を流し、白粉を汲替える。髪を洗い、櫛を入れ、丈より長く解捌
いて、緑の雫すらすと、香枕の香に霞むを待てば、鶏の声しばしば聞えて、元結

に染む霜の鐘の音。血る潔く清き身に、唐衣からころもを着け、袴はを穿くと、しらしらと早や旭あさひの影が、霧を破つて色を映す。

さて住吉の朝ぼらけ、白妙しろたえの松の樹の間を、静々と詣で進む、路の裳もすそを、臈月御殿さつきごてん、市の式殿いちにはじめて解いて、市の姫は十二人。袴を十二長く引く。……

その市の姫十二人、御殿の正面に揖ゆうして出づれば、神官、威儀正しく彼処かしこにあり。土かわら器けの神酒みき、結び昆布えぎ。やがて檜扇ひおうぎを授けらる。これを受けて、席に帰つて、緋や、萌も黄や、金銀の縫箔ぬいはく光を放つて、板戸も松の絵の影に、雲白く梢こずえめぐを繞る松林しょうりんに日の射さす中に、一列に並居なみいる時、巫子みこするすると立出たちいでて、美女の面一人おもひちごとに、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛まゆずみを描く、と聞く。

素顔の雪に化粧して、皓齒しろはに紅を濃く含み、神々しく気高いまで、お珊はここに、黛さえほんのりと描いている。が、女紅場の沐浴もくよくに、美しき膚はだを衆に抽ぬき、解き揃えた黒髪は、夥間なかもの丈を圧おさえたけれども、一人渠かれは、住吉の式に連る事をしなかつた。

間際に人が欠けては事が済まぬ。

世話人一同、袴腰を捻返ねじかえして狼狽うろたえたが、お珊が思うままな金子かねの力で、身代りの婦おんなが急に立った。

で、これのみ巫女みこの手を借りぬ、容色きりようも南地なんち第一人。袴の色の緋よりも冴えた、笹ささべ紅にの口許くちもとに美しく微笑ほほえんだ。

「多一さん、美津さん、ちよつと、どないな気がおしやす。」

唐織衣からおりころもに思いもよらぬ、生地きじの芸妓げいこで、心易げに、島台を前に、声を掛ける。

素袍しやの紗しやに透通る、燈ともしの影に浅葱あさぎとて、月夜に色の白いよう、多一は照らされた面色おももちだつた。

「なあ？」とお珊が聞返す、胸を薄く数を襲かさねた、雪の深い襲ねの襟に、檜扇を取つて挿していた。

「御寮人様。」

と手を下げて、

「何も、何も、私わたくしは申されませぬ。あの、ただ夢のようにござります。」とやつと云つて、烏帽子を正しく、はじめて上げた、女のような優しい眉の、右を残して斜めに卷いたは、答しもときずの疵むざんに、無慚ほうたいな縋帯。

お珊は黒目がちに、熟じつと睜みはつて、

「ほんに、そう云うたら夢やな。」

と清らかな襖ふすまのあたり、座敷を衝つとみまわした。

ト柱ふすま、襖ふすま、その金屏風に、人の影が残らず映った。

映つて、そして、緋に、紫に、朱鷺色ときいろに、二人の烏帽子、素袍、狩衣、彩あやあるままに色の影。ことにお珊さんの黒髪が、一条長ひとすじく、横雲掛けて見えたのである。

二十

時に、間まを隔てた、同じ浪屋の表二階に並んだ座敷は、残らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃えた、両側の揚屋と斉ひとしく、毛氈もうせんを聯つらねた中に、やがて時刻に、ここを出て、一まず女紅場で列を整え、先立ちの露払い、十人の稚児ちごが通り、前囃子まえばやしの屋台を挟さしはさんで、そこに、十二人の姫が続く。第五番に、檜扇ひおうぎ取つて練る約束の、我がお珊おのの、市随一の曠はれの姿を見ようため、芸妓げいこ、幫たいこもち間間をずらりと並べて、宵からここに座を構えた。

が、その座敷もまだ寂寞ひっそりして、時々、階子段はしこだん、廊下などに、遠い跫音あしおと、近く床しき衣きぬ摺ぬすれの音のみ聞ゆる。

お珊は袖を開き、居直つて、

「まあな、ほんに夢のようにあるな。私かて、夢かと思う。」
と、臙ろうた丈まゆずみけた黛うっとり、恍惚みまもと、多一の顔を瞻みまもりながら、

「けど、何の、何の夢やおへん。たとい夢やかて。……丸官はんの方もな、私が身に替えて、承知させた……三々九度さかすきやさかい、ああした我わがままな、好勝手な、朝云うた事は晩に変えやはる人やけど、こればかりは、私が附ついているよつて、承合うけあうて、どないしたかて夢にはせぬ。……あんじよう思うておくんなはれや。

美津みづさん、」

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほほ、」

手を口許かぎに翳かぎしたが、

「こう云うたかて、多一さんと貴女あなたとは、前世から約束したほど、深い交情なかでおいでる様子。今更ではあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。

思うてみれば、一昨日おとといの夜よさり、中の芝居で見たまでは天王寺の常楽会じようらくえにも、天神様の御縁日にも、ついで出会うた事もなかったな。

一見^{いちげん}でこうなつた。

貴女^{あなた}な、ようこそ、芝居の裏で、お爺^{じい}はんの肩摺^{さす}つて上げなはつた。多一^{ひとくさり}さんも人目忍^{おかみ}んで、貴女の孝行手伝わはつた。……自分抱するよつて、一条^{ひとくさり}など、可愛い可愛い女房^{おかみ}はん^{たん}に、沢山^{たくさん}芝居を見せたい心や。またな、その心を汲取^{くみと}つて、鶺鴒^{うずら}へ嬉々^{いそいそ}お帰りやした、貴女の優しい、仇気^{あしけ}ない、可愛らしさも身に染みて。……

私はな、丸官はん^{ぎしぎし}に、軋々^{ぎしぎし}と……四角な天窓^{あたま}乗せられて、鶺鴒^{うずら}の仕切も拷問^{ごうもん}の柱とやら、膝も骨も砕けるほど、辛い苦しい堪え難い、石を抱く責苦に逢うような中でも、身節^{みふし}も弛^{ゆる}んで、恍惚^{うつとり}するまで視^{なが}めていた。あの……扉^{ひらき}の、お仕置場らしい青竹の矢来^{やらい}の向うに……貴女^{あなた}等の光景^{ようす}をば。――

悪事は虎の千里走る、好い事は、花の香ほども外へは漏れぬ言うけれど、貴女^{あなた}二人は孝行の徳、恋の功^{てがら}、恩愛^{むくい}の報だすせ。誰も知るまい、私一人、よう知つた。

逢阪に店がある、餅屋の評判のお娘^こさん、御両親^{おふたおや}は、どちらも行方^{ゆきがた}知れずなつた、その借錢やら何やらで、苦勞しなはる、あのお爺さんの孫や事まで、人に聞いて知つたよつて、ふとな、彼やこれや談合しよう氣になつたも、私ばかりの心やない。

天満の天神様へ行た、その帰途^{かえり}に、つい虚氣^{うかうか}々々と、もう黄昏^{たそがれ}やいう時を、寄つてみ

たい気になつて、貴女の餅屋へ土産買う振りで入つたら、」

と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間をちよつと逢いに寄つて、町並灯の点された中に、その店だけは灯もつけぬ、暗いに島田が黒かつたえ。そのな、繙帯が白う見えた。」

二十一

小指を外らして指の輪を、我目の前へ、……お珊はそれが縁を結ぶ禁厭であるようにした。

「密々、話していやはつたな。……そこへ、私が行合させたも、この杯の瑞祥だすぜ。」

ここで夫婦にならばつたら、直ぐにな、別に店を出してもらうなり、世帯持つてそこから本店へ通うなり、あの、お爺はんと、三人、あんじよ暮らして行かはるように、私がちやと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんに否は言わせぬ。よつて、安心おしやすや。え、嬉しいやろ。美津さんが、あの、嬉しそうなえ。

「どうや、九太夫はん。」

と云った、お珊は、密と声を立てて、打解けた笑顔になった。

多一は素袍の浅葱を濃く、袖を緊めて、またその顔を、はッと伏せる。

「ほほほ多一さん、貴下、そうむつかしゆうせずと、胡坐組む気で、杯しなはれ。私かて、丸官はんの傍に居るのやない、この一月は籍のある、富田屋の以前の芸妓、そのつもりで酌をするのえ。」

仮祝言や、儀式も作法も預かるよつてな。後にまたあらためて、歴然とした媒妁人立てる。その媒妁人やつたら、この席でこないな串戯は言えやへん。

そない極らずといっておくれやす。なあ、九太夫はん。」

「御寮人様。」

と片手を畳へ、

「私はもう何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬようにござります。が、その九太夫は情のうござります。」

と、術なき中にも、ものの嬉しそうな笑を含んだ。

「そうやかて、貴方、一昨日の暮方、餅屋の土間に、……そないして、話していなはった

処へ、私が、卜行た……姿を見ると、腰掛^{かまち}框の縁の下へ、慌てもうて、潜つて隠れやつたやないかいな。」

言う——それは事実であつた。——

「はい、唯今でこそ申します、御寮人様がまたお意地の悪い。その框^{かまち}へ腰をお掛けなされまして、盆にあんころ餅寄せ、茶を持てと、この美津に御意^{ごい}ござります。

その上、入る穴はなし、貴女様の召しものの薰^{かおり}が、魔薬とやらを嗅^かぎますようで、気が遠くなりました。

その辛さより、犬になつてのこのこと、下屋を這出しました時が、なお術のうござりましてござります。」

「ほほほ可厭^{いや}な、この人は。……最初はな、内証^{うち}で情婦^{いろ}に逢やはるより何の余所^{よそ}の人でないものを、私の姿を見て隠れやはつた心の裡^{うち}が、水臭いようにあつて、口惜^{くやし}いと思うけれど、な、……手を支^ついて詫言^{わびい}やはる……その時に、門^{かど}のとまりに、ちよんと乗つて、むぐむぐ柿を頬張つていた、あの、大な猿^{おおき}が、土間へ跳下^{とびお}りて、貴下^{あんた}と一所に、頭を土へ附けたのには、つい、おろおろと涙が出たえ。

柿は、貴下の土産やつたそうに聞くな。

天王寺の境内で、以前舞わしてやった、あの猿。どないなつた問うた時、ちと知縁のものがあつて、その方へ、とばかり言うて、預けた先方さきを話しなはらん、住吉辺の田舎へなと思うたら、大切な許だいじとこに居るやもの。

おお、それなりで、貴方あんたたちを、私が方へ、無理に連れもつて来てしもうたが、うつかりしたな、お爺はんは、今夜は私の市女笠持つて附いてもらうよつて、それも留守。あの、猿はどうしたやろな。」

「はい、」

と娘が引取つた、我が身の姿と、この場の光景ようす、踊のさらいに台辞せりふを云うよう、細く透とおる、が声震えて、

「お爺さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に居て、ような、いつも留守してくれますのえ。」

二十二

「飼主とは申しまして、かえつて私の方が養われました、あの、猿でさえ、……」

多一は片手に胸を圧えて、

「御寮人様は申すまでもござりません、大道からお拾い下されました。……また旦那様の目を盗みまして、私は実に、畜生にも劣りました、……」

「何や……怪我に貴方は何やかて、美津さんは天人や、その人の夫やもの。まあ、二人して装束をお見やす、雛を並べたようやないか。」

けどな、多一さん、貴下な、九太夫やつたり、そのな、額の疵で、床下から出やはった処は仁木どすせ。沢山忠義な家来ではどちらやかてなさそうな。」

と軽口に、奥もなく云うて退けたが、ほんのりと潤みのある、瞼に淡く影が映した。

「ああ、わやく云う事やない。……貴方、その疵、ほんとにもう疼痛はないか。こないした嬉しさに、ずきずきしたかて忘らりよう。けど、疵は刻んで消えまいな。私が傍に居たものを。美津さんの大事な男に、怪我させて済まんんだな。」

そやけど、美津さん、怨みにばかり、思いやすな。何百人か人目の前で、打擲されて、熱と堪えていやはったも、辛抱しとげて、貴女と一所に、添遂げたいばかりなんえ。そしたら、男の心中の極印打ったも同じ事、喜んだかて可いのどす。」

お美津は堪えず、目に袖を当てようとした。が、朱鷺色衣に裏白きは、神の前なる薄紅

梅、涙に濡らすは勿体ない。緋縮緬を手に搦む、襦袢は席の乱れとて、強いて堪えた頬の
 鬢えくぼに、前髪の艶しとしとと。

お珊は眦まなじりを多一に返して、

「な、多一さんもそうだすやろな。」

「はい！」と聞返すようにする。

「丸官はんに、柿の核吹たねかけられたり、口車に綱つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇らうのポツキリ折れたまで、そないに打擲されやして、死身しにみになって堪えなはったも、誰にした辛抱でもない、皆、美津さんのためやろな。」

「……………」

「なあ、貴方、」

「……………」

「ええ、多一さん、新にいまくら枕ういことばの初言葉と、私もここでちゃんと聞く。……女子おなごは女子同士やよつて、美津さんの味方して、私が聞きたい。貴方はそうはなからうけど、男は浮気な……」

と見る、月がぱつちりと輝いた。多一は俯向うつむいて見なかった。

「……ものやさかい、美津さんの後の手券てがたに、貴方の心を取っておく。ああまで堪えやした辛抱は、皆女子へ、」

「ええ、」

「あの、美津さんへの心中だてかえ。」

多一はハツと畳に手を……その素袍、指貫さしぬきに、刀なき腰は寂しいものであつた。

「御寮人様、御推量を願ひとうござります。誓文それに相違ござりません。」

お美津の両手も、鶴の白羽の狩衣に、玉を揃えて、前髪摺れに支ついていた、簪かんざしの橘たちばな薫りもする。

「おお……嬉し……」

と胸を張つて、思わず、つい云う。声の綾あやに、我を忘れて、道成寺の一条の真紅の糸が、鮮麗あざやかに織込まれた。

それは禁制の錦であつた。

ふと心付いた状さまして、動悸どうきを鎮めるげに、襟えりなる檜扇ひおうぎの端をしつかと圧おさえて、ト後うしろを見て、襖ふすまにすらり靡なびいた、その下げ髪ななの丈を視みめた。

お珊の姿は陰々とした。

二十三

夫婦が二人、その若い顔を上げた時、お珊は何気なき面色おももちした。

「ほんになあ、くどいようなが多一さん、よう辛抱しやはった。中の芝居で、あの事がなかつたら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんはこの祝言を承知さす事はようせんもの。

……そりやな、夫婦にはならはったかて、立行くように世帯が出来んとならんやないか。

通い勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんは、応、言わせたも、皆、貴方あんたが、美津

さんのために堪こらえなはった、心中しんじゅう立だて一つやな。十年七年の奉公を一度に済ましなはつ

たも同じ事。

額の疵きずは、その烏帽子に、金剛石ダイヤモンドを飾つたような光が映さす……おお、天晴あつぱれなお婿は

ん。

さあ、お嫁はん、お酌あてしような。」

と軽く云つたが、艶麗あでやかに、しかも威儀ある座を正して、

「お盞さかずき。」

で、長柄の銚子ちようしに手を添えた。

朱塗まきえの蒔絵みつぐみの三組みつぐみは、浪に夕日の影を重ねて、蓬菜ほうらいの島の松の葉越に、いかにせし、鶴は狩衣の袖をすくめて、その盞を取ろうとせぬ。

「さ、お受けや。」

と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、騒さわ立たつらしい胸の響きに、烏帽子の総ふさの揺るのみ。美津は遣瀬やるせなげに手を控える。

ト熟じつと視みて、

「おお、まだ年の行かぬ、嬰兒ねねはんや。多一たはんと、酒事さきごとしやはった覚えがないな。貴あ女んな盞たを先へ取るのを遠慮えんりょやないか。三々九度は、嫁はんが初手に受けるが法やけれど、別に儀式だった祝言やないよつて、どうなと構わん。

そやつたら多一さん、貴方あんた先へお受けやす。」

「はい、」と斉ひとしく逡巡しりごみする。

「どうしやはったえ。」

「御寮人様、一生に一度の事でござります。とてもものに、ものが逆になりませんよう、やつぱり美津から……」

とちよつと目を合せた。

「女から、お盞を頂かして下さりまし。」

「そやかて、含羞はにかんでいて取んなはらん。……何や、貴方あんたがた、おかしなえ。」

ふと気色ばんだお珊さまの状に、座が寂しんとして白けた時、表座敷に、テンテン、と二ツ三ツ、音ねじめの音が響いたのである。

二人は黙つて差俯さしうつむ向く。……

お珊は、するりと膝を寄せた。屹ぎつとして、

「早うおしや！ 邪魔が入るとならんよつて、私も直じきに女紅場へ行かんとならんえ。……

……な、あの、酌人が不足なかい。」

二人は、せわしげに瞳を合して、しきりに目でものを云つていた。

「もし、」

と多一たいつが急せいた声で、

「御寮人様、この上になお罰が当ります。不足やなんの、さような事がありました可いいものでござりますか。御免下さりまし、申しましよう。貴女様、その召しました、両方のお袂たもとの中が動きます。……美津は、あの、それが可恐こわいのでござります。」と判然はつきり云つた。

と、頤おとがいを檜扇ひおうぎに、白小袖の底を透すかして、

「これか、」

と投げたように言いながら、衝つと、両手を中へ、袂を探つて、肩をふらりと、なよなよとその唐織の袖を垂れたが、品ひんを崩して、お手玉持つよ、と若々しい、仇気あじけない風があつた。

「何や、この二条ふたすじの蛇が可恐い云うて?……両方とも、言合わせたように、貴方あんた二人が、自分たちで、心願掛けたものどつせ。

餅屋の店で逢うた時、多一さん、貴方あんたはこの袋一つ持っていた。な、買うて来るついではあるて、一夜ひとよ祈いのりはあげたけれど、用の間が忙しゆうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行く隙ひまがない、頼まれて欲ほしい——云うて、美津さんに託ことづきよう、とそれが用で顔見に行ゆかした云うたやないか。」

二十四

「美津さんもまた、日が暮れたら、高津へ行て放す心やった云うて、自分でも一筋。同じ

袋に入つたのが、二ツ、ちゃんと、あの、猿の留木とまりぎの下に揃えてあつて、——その時、私に打明けて二人して言やはつたは、つい一昨日おとといの晩方や。

それもこれも、貴方あんたがた、芝居の事があつてから、あんな奉公早う罷やめて、すぐにも夫婦になれるようにと、身体からだは両方別れていて、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈いのりを掛けやはる。……

蛇も二筋落合うた。

案の定、その場から、思いが叶かのうた、お二人さん。

あすこのな、蛇屋に蛇は多けれど、貴方がたのこの二条ふたすじほど、験げんのあつたは外にはないやろ。私かて、親はなし、稚い時ちいさから勤つとめをした、辛い事、悲しい事、口惜くやしい事、恋しい事、——

と懷手のまま、目を睜みはつて、

「死にたいほどの事もある。……何々の思おもいが遂げたいよつて、貴方二人に類似あやかりたさに、同じ蛇を預つた。今少し、身に附けていたいよつて、こうしておいておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けどな、思い詰めては、自分の手でも持ったもの。一度、願ねがいが叶いうた上では、人の袂たもとに

あるのさえ、美津さん、婦おんなは、蛇は、可いや厭いやらしな！

よう貴女あなた、これを持つまで、多一さんを思やはった、婦おんな同士や、察せいでか。――袂たもとにあつたら、粗相して落すとならん。憂きづかい慮いなよろさかい、私がこうするよつて、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、内うちぶところ懐くわいの乳ちのあたり、浪打つように膨らみたり。

「婦おんなの急所きょくで圧おさえておく。……乳ち銜くわえられて、私が死のうと、盞のぞの影も覗のぞかせぬ。さ、美津さん、まず、お前に。」

お珊は長柄をちようと取る。

美津は盞を震えて受けた。

手の震えで滴たたら々と露散たまちるごとき酒の雫しずく、蛇の色ならずや、酌参るお珊の手を掛けて燈ともしびの影ながら、青白き艶つやが映つたのである。

はたはたとお珊が手を拍たたくと、かねて心得こころえさしてあつたろう。廊下の障子の開く音して、すらすらと足袋たびずれ摺すに、一間を過ぎて、また静しずかにこの襖ふすまを開けて、

「お召し、」

とそこへ手を支たいた、裾模様の振袖は、島田の丈長たけなが、舞妓まいこにあらず、家うちから斉眉かしずいて

来ている奴やつこであつた。

「可よいかい。」

「はい。」と言いさま、はらはらと小走りに、もとの廊下へ一度出て、その中庭を角にした、向うの襖をすらりと開けると、閨紅ねがねに、翠みどりの夜具。枕頭まくらもとにまた一人、同じ姿の奴が居る。

お珊が黙つて、此方こなたから差覗さしのぞいて立つたのは、竜田姫たつたひめのイんで、霜葉もみぢの錦たにの谿深く、夕映えたるを望める光景ありさま。居たのが立つて、入つたのと、奴二人の、同じ八尺対扮装ついでたち。紫の袖、白襟が、紫の袖、白襟が。

袖口燃ゆる緋縮緬ひぢりめん、ひらりと折目に手を掛けて、きりきりと左右へ廻して、枕おを蔽おほう、六枚屏風びようぶ、表に描かいたも、錦葉にしきばなるべし、裏に白銀しろがねの水が走る。

「あちらへ。」

お珊が二人を導いた時、とかくして座を立つた、美津が狩衣の袴の裾は、膝を露顕あらわな素足なるに、恐ろしい深山路みやまじの霜を踏んで、あやしき神の犠牲にえに行く……なぜか畳は辿々たどたどしく、ものあわれに見えたのである。奴二人は姿を隠した。

二十五

屏風を隔てて、この紅の袴した媒人は、花やかに笑ったのである。

一人を褥の上に据えて、お珊がやがて、一人を、そのあとから闌へ送ると、前のが、屏

風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪であとを追つて、手を取つて、枕頭から送込むと、そこに据えたのが、すつ

と立つて、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに続いて、縋つて抱くばかりにして、送込むと、おさえておいたのが、はらはら出る。

素袍、狩衣、唐衣、綾と錦の影を交えて、風ある状に、裾袂、追いつ追われつ、ひらひらと立舞う風情に聞え繞つた。巫山の雲に棧懸れば、名もなき恋の淵あらむ。左、橘、右、桜、衣の模様の色香を浮かして、水は巴に渦を巻く。

「おほほほほ、」

呼吸も絶ゆげな、なえたような美津の背を、屏風の外で抱えた時、お珊は、その花やかな笑を聞かしたのである。

好き機会とや思ひけん。

廊下^{あしおと}に跣音、ばたばたと早く刻んで、羽織袴の、宝の市の世話人一人、真^{まつ}先^{さき}に、すすつすすつと来る、当浪屋の女房^{かみ}さん、仲居まじりに、奴^{にんず}が続いて、迎いの人数。

口々に、

「御寮人様。」

「お珊瑚様。」

「女紅場では、屋台の組も乗込みました。」

「貴女ばかりを待兼ねてござります。」

襖の中から、

「車は？」

と静^{しずか}に云う。

「綱も申し着けました、」と世話人が答えたのである。

「待たせはせぬえ、大事な処へ、何や！」

と声^{りん}が凜^{りん}とした。

黙って、すたすた、一同は廊下を引く。

とばかりあつて、襖をあけた時、今度は美津が閨に隠れて、枕も、袖も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠つりかごの、白玉椿しらたまつばきの葉の艶より、ぼんやりとした素袍で立つた。

襖ふすまがくれの半身で、廊下の後前あとさきを熟じつと視みて、人の影もなかった途端に、振返ると、引寄せた。お珊かいなうなの腕うでが頸くちにかかると、倒れるように、ハタと膝を支ついた、多一の唇に、俯向うつむきざまに、衝つと。――

丸官の座敷を、表に視ながめて、左右に開いたに立寄りもせず、階子段はしごだんを颯さつと下りる、とたちまち門かどへ姿が出た。

軒を離れて、俥くるまに乗る時、欄干に立つた、丸官、と顔を上下うへしたに合すや否や、矢を射るような二人曳ににんびき。あれよ、あれよと云うばかり、廓くわくの灯に影を散らした、群集ぐんじゆはぱつと道を分けた。

宝の市の見物は、これよりして早や宗右衛門町の両側に、人垣を築いて見送ったのである。

その年十月十九日、宝の市の最後の夜よは、稚児ちご、市女いちめ、順々に、後あと圧おさえの消防夫しやうぼうふが、篝かがりび火赤き女紅場の庭を離れる時から、屋台の囃子、姫たちなど、傍目わきめも触ふらぬ婦おんなたちは、さもないが、真先まっさきに神輿みこしを荷にのうた白丁はくちやうはじめ、立傘たてがさ、市女笠いちめがさ持ちの人足など、

頻りに^{しき}気にしては空を^{なが}視めた。

通り筋の、屋根に、^{ひさし}廂に、しばしば^{からす}鴉が鳴いたのである。

次第に数が増すと、まざまざと、^{うすづき}薄月の曇った空に、^{くちばし}嘴も翼も見えて、やがては、^{ねり}練ものの上を飛交わす。

列が道頓堀に小休みをした時は、立並ぶ芝居の中の見物さえ、頻りに^{からすなき}鴉鳴を聞いた、と後で云う。……

二十六

「^{そつぱ}宗八、^{そつぱ}宗八。」

浪屋の表座敷、床の間の正面に、丸田官蔵、この成金、何の好みか、例なる^{つめえり}詰襟の紺の洋服、^{たかあぐら}高胡坐、座にある^{ほうかん}幫間を大音に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、^{あとおし}後押で^{かけつ}駈着けて、今帰った処じやな。」

「御意にござります、へい。」

「何か、直ぐに連れてここへ来る手筈じやった、猿は、留木とまりぎから落ちて縁の下へ半分か身みを突つ込んで、斃くた死ばっていたげに云う……嘘でないな。」

「実説正銘にござりまして、へい。餅屋みせ店では、爺じいの伝つ五ごめに、今夜、貴方あなた様、お珊瑚さんごの方かた様、」

と額たまを敲たたいて、

「すなわち、御寮人様、市へお練出しのお供を、お好このとあつて承ります。……さてまた、名代娘のお美津さんは、御夫婦これに——ええ、すなわち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巢あきすにござります。」

処へ宗八、丸官閣下お使者といたし、車を一散に乘着けまして、隣家の豆屋の女房立会い、戸を押開いて見ましたれば、いや、はや、何とも悪食あくじきがないいた様子、お望みの猿は血を吐いて斃おち果はてておりましたに毛頭相違さうござりません。」

「うむ。」

と苦切にがりきつて頷うなずきながら、

「多一、あれを聞いたかい、その通りや。」と、ぐつと見下ろす。

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏ひれふしていたのである。

これより先、余り御無体、お待ちや、などと、慌しい婦まじりの声の中に、丸官の形、猛然と躍上おどりあがつて、廊下を鳴らして魔のごとく、二人の閨ねやへ押寄せた。

襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき明星のごとき別天地に、こは思いも掛けず、二人の姿は、綾の帳とばりにも蔽おほわれず、指貫さしぬきやなど、烏帽子の紐ひもも解かないで、屏風の外に、美津は多一の膝ふに俯し、多一は美津の背せなに額を附けて、五人囃子の雛二個ひなふたつ、袖を合せたようであつた。

揃つて、胸先がキヤキヤと痛むと云う。

「酒啖くらえ、意気地なし！」

で、有無を言わせず、表二階へ引出された。

欄干の緋ひの毛氈もうせんは似たりしが、今夜は額を破るのでない。

「練ものを待つ内、退屈じや。多一やい、皆への馳走ちそうに猿を舞わいて見せてくれ。恥辱はじではない。汝わりや、丁稚でっちから飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一人にんむかし。旧を忘れぬためという……取立てた主人の訓戒いましめと思え。

呼べ、と言え、婦おんなどもが愚図ぐず々々吐ぬかす。新枕にいまくらは長鳴鶏ながなきどりの夜よがあけるまでは待かねる。

主従は三世の中じや、遠慮なしに閨へ推参に及んだ、悪く思うまいな。汝^{わり}や、天王寺境内に太鼓たたいていて、ちよこんと猿^{おんぶ}負背で、小屋へ歸りがけに、太夫どのに餅買^{われ}うて、汝も食^{われ}いおつた、行歸りから、その娘は馴染^{なじみ}じやげな。足洗うて、丁稚になるとて、右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ヶ餅と云うこと、ここに居る婦^{おんな}どもが知つた中。

田畝^{たんぼ}の鼠^{ねずみ}が、蝙蝠^{こうもり}になつた、その素袍^{すおう}ひらつかいたかて、今更隠すには当らぬやて。かえつて卑怯^{ひきょう}じや。遣^やつてくれい。

が、聞く通り、ちやと早手廻しに使者を立てた、宗八が歸つての口上、あの通り。残念な、猿太夫は斃^おちたとあるわい。

唄なと歌え、形なと見せおれ。

何吐^ぬす、

と、とりなしを云つた二三人の年増の芸妓^{げいこ}を睨^{ねめ}廻^{まわ}いて、

「やい、多一！」

「致します、致します。」

と呼吸いきを切つて、

「皆さん御免なさりまし。」

多一はすつと衣紋えもんを扱しごいた。

浅葱あさぎの素袍、侍烏帽子が、丸官と向う正面。芸妓、舞妓は左右に開く。

その時、膝に手を支つかいて、

「……ま猿めでどうのう仕つかまつる、踊うるが手許てもと立廻り、肩に小腰をゆすり合せ、静やかに舞うたりけり……」

声を張つた、扇拍子、畳を軽く拍うちながら、「筑紫下りの西国船、艫ともに八挺ちよう、舳へに八挺、十六挺の櫓ろかいを立たてて……」

「やんややんや。ああ惜おしい、太夫が居おらぬ。千代鶴やい、猿になれ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴こいつ。ええ！ 婆ばばどもでまけてやろう、古猿こげざるになれ、此奴等こいつら……立たぬな、おのれ。」

と立身たちみ上あがりに、盞さかずきを取つて投げると、杯洗はいせんの縁ふちにカチリと碎けて、颯さつと欠かけらが四辺あたり

に散つた。

色めき白ける燈に、一重瞼の目を清しく、美津は伏せたる面を上げた。

「ああ、皆さん、私が猿を舞いまつせ。旦那さん、男のためどす。畜生になつてな、私が天王寺の銀杏の下で、トントン踊つて、養うよつてな。世帯せいでも大事な、もう貴下、多一さんを虐めんとおくれやす。

ちやと隙もろうて去ぬよつて、多一さん、さあ、唄いいな、続いて、」

と、襟の扇子を衝と抜いて、すらすらと座へ立った。江戸は紫、京は紅、雪の狩衣被けながら、下萌ゆる血の、うら若草、萌黄は難波の色である。

丸官は掌を握つた。

多一の声は凜々として、

「しもにんにんの宝の中に——火取る玉、水取る玉……イヤア、」

と一つ掛けた声が、たちまち切なそうに掠れた時よ。

（ハオ、イヤア、ハオ、イヤア、）霜夜を且つちる錦葉の音かと、虚空に響いた鼓の掛声。
（コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タツポツポ）摺鉦入れた後
囃子が、遙に交つて聞えたは、先駆すでに町を渡つて、前囃子の間近な氣勢。

が、座を乱すものは一人もなかった。

「船の中には何とお寝るぞ、苦を敷寝に、苦を敷寝に 榻枕、榻枕。」

玉を伸べたる脛もめげず、ツト美津は、畳に投げて手枕した。

その時は、別に変った様子もなかった。

多一が次第に、齒も軋むか、と声を絞って、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りてまた冴ゆる、しばし曇りてまた冴ゆる、しばし曇りてまた冴ゆる……」

ト袖を捲いて、扇子を翳し、胸を反らして熟と仰いだ、美津の瞳は氷れるごとく、瞬もせず睜ると斉しく、笑靨に颯と影がさして、爪立つ足が震えたと思うと、唇をゆがめた皓齒に、蒼のような血を嚙んだが、烏帽子の紐の乱れかかって、胸に千条の鮮血。

「あ、」

と一声して、ぼったり倒れる。人目も振も、しどろになって背に縋った。多一の片手の掌も、我が唇を圧余って、血汐は指を溢れ落ちた。

一座わつと立騒ぐ。階子へ遁げて落ちたのさえある。

引仰向けてしつかと抱き、

「美津さん！……二、二人は毒害された、お珊、お珊、御寮人、お珊め、婦！」
おんな

二十八

「床几、」
しょうぎ

と、前後の屋台の間に、市女の姫の第五人目で、お珊が朗かな声を掛けた。背後に二人、朱の台傘を廂より高々と地摺の黒髪にさしかけたのは、白丁扮装の駕籠人足。並んで、萌黄紗に朱の総結んだ、市女笠を捧げて従ったのは、特にお珊が望んだという、お美津の爺の伝五郎。

印半纏、股引、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じとりの地に据えた床几に、お珊は真先に腰を掛けた。が、これは我儘ではない。練ものは、揃って、宗右衛門町のここに休むのが習であつた。

屋台の前なる稚児をはじめ、間をものの二間はかりずつ、真直に取つて、十二人が十二の衣、色を勝った南地の芸妓が、揃って、一人ずつ皆床几に掛かる。

台傘の朱は、総二階一面軒ごとの緋の毛氈に、色映交わして、千本植えたる桜の梢、

廊くるわの空に咲かかる。白の狩衣、紅梅小袖としひ、灯の影にちらちらと、囃子の舞妓、芸妓など、霧に揺据ゆりすわつて、小鼓、八雲琴やくもことの調を休むと、後囃子あとばやしなる素袍の稚児が、浅葱桜あさぎざくらを織交せて、すり鉦がね、太鼓の音も憩う。動揺じよめき渡る見物は、大河の水を堰せいたよう、見渡す限り列のある間、——一尺ごとに百目蠟燭ひやくめろうそく、裸火あおを煽らし立てた、黒塗に台附の柵の堤を築いて、両方へ押分けたれば、練もののみが静まり返って、人形のように美しく且つ凄すこい。

ただその中を、福草履ひたひたと地を刻んで、袴はかまの裾せわを忙しそう。二人三人、世話人が、列の柵摺ずれに往ゆきつ還かえりつ、時々顔を合わせて、二人囁ささやく、直ぐに別れてまた一人、別な世話人ととちよつと出遇であう。中に一人落しものをしたように、うろうろと、市女たちの足あしも許とを覗のぞいて歩行あるくものもあつて、大な蟻おおきの働振はたらきぶり、さも事ありげに見えるばかりか、傘さしかけた白丁どもも、三人ならず、五人ならず、眉ひそを顰め口を開けて空を見た。

その空は、暗く濁つて、ところどころ朱の色を交えて曇つた。中を一条ひとすじ、列を切つて、どこからともなく白氣はつきが渡つて、細々と長く、遙はるかに城ある方かたに靡なびく。これを、あたりの湯屋の煙、また、遠い煙筒えんとつの煙が、風の死したる大阪の空を、あらん限り縫うとも言つた。宵には風があつた。それは冷たかつたけれども、小春風こはるなぎの日の余残なごりに、薄月おぼろさえ朧

おぼろ々々と底の暖いと思つたが、道頓堀で小休みして、やがて太左衛門橋を練込む頃から、真暗つくらになつたのである。

鴉は次第に数を増した。のみならず、白氣の怪あやしみもあるせいか、誰云うとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の数が一人多い。すべて十三人あると言交わす。

世話人てあい徒が、妙に氣にして、それとなく、一人々々数えてみると、なるほど一人姫が多い。誰も彼も多いと云う。

念のために、他所よそ見ながら顔を覗のぞいて、名を銘々に心に留めると、決して姫が殖ふえたのではない。定の通り十二人。で、また見渡すと十三人。

……式の最初、住吉詣もうでの東雲しののめに、女紅場で支度はしたが、急にお珊わかが氣が變つて、社へ参らぬ、と言つたために一人俄にわか拵ごしらえに数を殖ふやした。が、それは伊丹幸いたこうの政巳まさみと云つて、お珊わかが稚い時から可愛がつた妹分。その女は、と探つてみると、現に丸官に呼ばれて、浪屋の表座敷に居ると云うから、その身代りが交つたというのでもないのに。……

それさえ尋常ただならず、とひしめく処に、搗かてて加えて易からぬは、世話人の一人が見附けた——屋台が道頓堀を越す頃から、橋へかけて、列の中に、たらたら、たらたらと一ひとし雫ずくずつ、血が落ちていると云うのである。

二十九

一人多い、その姫の影は臃^{おぼろ}でも、血のしたたりは現に見て、誰が目にも正^{まさ}しく留^{とど}つた。
 灯の影に地を探^{おだやか}つて、穩^{おだやか}ならず、うそうそ搜^{さがし}ものをして歩^{ある}行くのは、その血のあとを辿^{たど}るのであらう。

消防^{しやうし}夫にも、駕籠屋にも、あえて怪我をしたらしいのではない。婦^{おんな}たちにも様子は見えぬ。
 もつとも、南地第一の大事な市の列に立てば、些^{ささい}細^きな疵^{きず}なら、弱^おい舞妓も我慢^かして秘^{かく}して退^のけよう。

が、市に取^いつては、上もなき可^{いまわ}忌^いしさで。

世話人は皆激^{ひそ}しく顰^{ひそ}んだ。

知らずや人々。お珊は既に、襟に秘^{かく}し持^もつた縫針で、裏を透^{とお}して、左の手首の動脈を刺し貫^くいていたのである。

ただ、初^{はじめ}から不思議な血のあとを拾^{ひろ}つて、列を縫^ぬつて検^{しら}べて行^ゆくと、静^{しずしず}々と揃^{そろ}つて練る時から、お珊の袴の影で留^{とど}つたのを人を知^しつた。

ここに休んでから、それとなく、五人目の姫の顔を差さ覗くものもあつた。けれども端然まげずみとしていた。黛まゆずみの他に玲瓏れいろうとして顔に一点の雲もなかった。が、右手めてに捧たげた橘たちばなに見入るのであろう、寂さみしく目を閉じていたと云う。

時に、途中ではさもなくかつた。ここに休む内に、怪しき氣のこと、点滴したたる血の事、就なかんに、姫の数の幻に一人多い事が、いつとなく、伝えられて、烈はげしく女どもの氣を打つた。自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる姫は皆、齊ひとしくお珊が臨終の姿と同じ、肩のさみしい風情となつた。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚児だ——と叫ぶ——柵ぐんじゆの外の群集の波を、鯁しゃちに追われて泳ぐがごとく、多一の顔が真蒼まつさおに顫あれた。

「お呼びや、私をお知らせや。」

とお珊が云つた。

伝五爺じじいは、懷を大きく、仰天した皺しわ嗟がれ声を振絞つて、

「多一か、多一はん——御寮人様はここじや。」と喚わめく。

早や柵の上を蹠よろめき越えて、虚空を掴つかんで探したのが、立直つて、衝つと寄つた。が、床几の前に、ぱったり倒れて、起直りざまの目の色は、口よりも血走つた。

「ああ、待遠まちどおな、多一さん、」

と黒髪揺ゆぐ、吐息といきと共に、男の肩に手を掛けた。

「毒には加減をしたけれど、私が先へ死にそうでな、幾たび目をば瞑ねむつたやろ。やつとこ
こまで堪こたえたえ。も一度顔を、と思うよつて……」

丸官の握拳にぎりこぶしが、時に、瓦の欠片かわちかけのごとく、群集を打ちのめして掻分かきわける。

「傘でかくしておくれやす。や、」と云う。

台傘が颯さつと斜めになった。が、丸官の忿怒ふんぬは遮り果てない。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗ろうとするのを、一目見ると、懷中ふとこへ衝と手を入れ
て、両方へ振つて、扱しいて、投げた。既に袋を出ていた蛇は、二筋電のごとく光つて飛ん
だ。

わ、と立騒ぐ群集ぐんじゆの中へ、丸官の影は揉込もみこまれた。一人渠かれのみならず、もの見高く、
推掛おしかかつた両側の千人は、一斉に動揺どうゆを立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫ぶ。茶屋揚屋の軒
に余つて、土足の泥波を店へ哄どつと……津波の余残なごりは太左衛門橋、戒橋えびすばし、相生橋に溢
れかかり、畳屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鴉おおが蔽おほいかかつて、人の目、頭かしらに、嘴はしを鳴らすを。

お珊に詰寄る世話人は、また不思議にも、蛇が、蛇が、と遁惑うた。その数はただ二条ではない。

屋台から舞妓が一人倒に落ちた。そこに、めらめらと鎌首を立て、這いかかったためである。

それ、怪我人よ、人死よ、とそこもここも湧揚る。

お珊は、心静に多一を抱いた。

「よう、顔見せておくれやす。」

「口惜い。御寮人、」と、血を吐きながら頭を振る。

「貴方ばかり殺しはせん。これお見やす、」と忘れたように、血が涸れて、蒼白んで、早や動かし得ぬ指を離すと、刻んだように。しつかと持った、その脈を刺した手の橘の鮮血に染まったのが、重く多一の膝に落ちた。

男はしばらく凝視めていた。

「口惜いは私こそ、……多一さん。女は世間に何にも出来ん。恋し、愛しい事だけには、立派に我ままして見しよう。」

宝市のこの服装で、大阪中の人の見る前で、貴方の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴

て見しよう、と命をかけて思うたに。……先刻^{さつき}蓋^{ふた}させる時も、押返して問うたもの、お珊瑚^{さんご}お前へ心中立や、と一言いうてくれはらぬ。

一昨日^{おととい}の芝居の難儀も、こうした内証があるよつて、私のために、堪^{こら}えやはった辛抱やつたら、一生にたった一度の、嬉しい思いをしようもの、多一さん、貴^{あなた}下^{はたち}は二十。三つ上の姉で居て、何でもこうまで迷うたやら、堪忍しておくれや。」

とて、はじめて、はらはらと落涙した。

絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度^{ひとたび}は領^{うなず}いたが、

「私は、私は、御寮人、生命^{いのち}が惜^{おし}いと申しません。可^{かわ}哀^{あい}氣^げに、何でも、何でも、お美津を……」
と聞きも果さず……

「わあ、」と魂^{たまぎ}切る。

伝五爺^{じじい}の胸^{おき}を圧えて、

「人が立騒いで邪魔したら、撒散^{まきちら}かいて払い退きようと、お前に預けた、金貨銀貨が、その懐^{ふところ}中に沢山^{たくさん}ある。不思議な事で、使わいで済んだよつて、それもつて、な、えらい不足なやろけれど、不足、不足なやろけれど、……ああ、術ない、もう身がなえて声も出ぬ。」

お聞きやす、多一さん、美津さんは、一所に連れずと、一人活かいておきたかった。貴方と二人、人は交ぜず、死ぬのが私は本望なが、まだこの上、貴方にも美津さんにも、濟まん事や思うたによつてな。

違うたかえ、分つたかえ、冥土へ行てかて、二人をば並べておく、……遺瀨ない、私の身にもなつてお見や。」

幽ながらに声は透る。

「多一さん、手を取つて……手を取つて……離さずと……——左のこの手の動く方は、義理やあの娘の手をば私が引く。……さあ、三人で行こうな。」

と床几を離れて、すつくと立つ。身動ぎに乱る黒髪。髻ふつ、と真中から二岐に颯となる。半ばを多一に振掛けた、半ばを握つて捌いたのを、翳すばかりに、浪屋の二階を指麾いた。

「おいでや、美津さんえ、……美津さんえ。」

練ものの列は疾く、ばらばらに糸が断れた。が、十一の姫ばかりは、さすが各目に名を恥じて、落ちたる市女笠、折れたる台傘、飛々に、背を潜め、顔を蔽い、膝を折敷きなどしながらも、嵐のごとく、中の島籠めた群集が叫喚の凄じき中に、紅の袴一人々

々、点々として皆留^{とど}まつた。

と見ると、雲の黒き下に、次第に不知火^{しらぬい}の消え行く光景^{ありさま}。行方も分かぬ三人に、遠く遠

く前途^{ゆくて}を示す、それが光なき十一の緋の炎と見えた。

お珊^{かん}は、幽^{かすか}に、目も遙々^{はるばる}と、一人ずつ、その十一の燈^{とも}を視^みた。

明治四十五（一九一三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十四卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南地心中

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>